

阿志岐シメノグチ遺跡

(阿志岐古墳群 A 群 3 号墳)

福岡県筑紫野市阿志岐シメノグチ所在遺跡の調査

筑紫野市文化財調査報告書

第 1 集

1 9 7 2

筑紫野市教育委員会

阿志岐シメノグチ遺跡

(阿志岐古墳群A群3号墳)

福岡県筑紫野市阿志岐シメノグチ所在遺跡の調査

序

筑紫野市は太宰府町に隣接し、大宰府政庁の遺跡にかくれて筑紫野市自体の文化遺産が軽視されがちであったが、今回の阿志岐遺跡の発掘調査によって、むしろ大宰府政庁以前のものが立証されるものとして大変貴重な調査であったと思います。

現在まで地中に埋もれ、または徒らに看過されていた文化財を本格的に発掘調査し、あるいは見直して、筑紫野市の真の姿を再現することは目下の急務でありかつ市民全体の責務であるといってもよいと考えます。

この報告書が古代文化史研究の一助となれば非常な幸であります。

尚、現地調査から本書の刊行までご尽力いただきました高山明氏、青柳栄一氏、赤崎敏男氏の各氏をはじめ文化財調査室の皆さんや発掘調査にご協力いただきました地区住民の方々に深く感謝するところであります。

昭和 47 年 4 月 1 日

筑紫野市教育委員会

教育長 山 崎 茂 太

例 言

1. 本報告は、昭和46年4月1日より、4月11日にかけて緊急調査を行なった、福岡県筑紫野市大字阿志岐字シメノグチ所在の阿志岐古墳群（A群）3号墳および、阿志岐シメノグチ遺跡の発掘報告書である。
2. 発掘調査は、筑紫野市教育委員会が主体となり実施した。
3. 発掘担当者は、県立朝倉高等学校教諭高山明が当たった。
4. 出土品の整理は、発掘参加者全員で当たり、整図は立松彰、編集は高山明、赤崎敏男が当たった。
5. 本書の執筆は、各自分担して行ない、目次、文末に示す通りである。
6. 写真は、赤崎敏男、森永裕が担当した。
7. 発掘関係者は次の通りである。

筑紫野市市長 船越平八郎

教 育 長 山崎 茂太

社会教育課課長 武藤 久雄

社会教育課係長（文化財担当）笠 武人

現場担当主任 県立朝倉高等学校教諭 高山 明

調 査 員

赤崎敏男，立松 彰（国学院大学），長野卓司，佐藤保雄，森永 裕，
畠田利郎，藤井正紀（福岡大学） 三島 肇（西南大学）

調査補助員

岩崎真知子，青木のり子，山口陽子，中川真理子，立石恵子（県立筑紫中央高等学校歴史部），奥村，松本，山口，平石，萩尾（市立二日市中学校）青柳佐千代（筑紫女学園中学校）

調査協力者

青柳栄一，中山典子（遺物整理担当）

教育委員会職員，土木課職員，農業土木課職員

本文目次

第1	序	説	
	1.	はじめに	 (立松 彰) 2
	2.	調査の経過	 (佐藤 保雄) 3
	3.	位置と環境	 (赤崎 敏男) 4
第2	古墳の構造と出土品		 (赤崎 敏男) 7
	1.	墳 丘	 7
	2.	内部主体 (石室)	 7
	3.	石室内出土遺物	 12
	4.	墳丘出土遺物	 15
第3	住居址と出土品		 (長野 卓司) 16
	1.	住 居 址	 16
	2.	遺 物	 16
第4	破壊墳		 (佐藤 保雄) 19
	1.	破壊墳	 19
第5	6 トレンチ		 (赤崎 敏男) 20
	1.	遺 跡	 20
	2.	出土遺物	 20
第6	ま と め		 (高山明, 赤崎敏男) 23
	1.	古 墳 群	 23
	2.	墳 丘	 23
	3.	内部主体 (石室)	 23
	4.	遺 物	 24
	5.	築 造 年 代	 24
	6.	住 居 址	 25
	7.	遺 物	 25
第7	付 論		 (赤崎 敏男) 26
	1.	甕棺葬における祭祀について	
		— 筒形器台を中心として —	

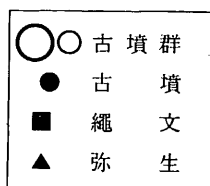
挿 図 目 次

第 1 図	阿志岐古墳群の周辺遺跡	1
第 2 図	周 辺 地 形 図	5
第 3 図	A群3号墳地形図	6
第 4 図	墳 丘 断 面 図	8
第 5 図	石室平面図，閉塞部	10
第 6 図	石室実測図，遺物出土状態	11
第 7 図	石室内出土遺物	12
第 8 図	墳 丘 出 土 遺 物	15
第 9 図	住 居 址	17
第 10 図	住居址出土遺物	18
第 11 図	6 トレンチ出土遺物	22
第 12 図	筒形器台出土分布図，筒形器台	28
第 13 図	筒形器台出土状態，筒形器台	29



第 1 図 阿志岐古墳群の周辺遺跡

- | | |
|---------------------|---------|
| 1 阿志岐古墳群A群, シメログチ遺跡 | 2 塚口古墳群 |
| 3 高雄遺跡 | 4 野黒坂遺跡 |
| 5 天山古墳群 | |
| 6 池田古墳群 | 7 砥上古墳群 |
| | 8 吹田古墳群 |



第 1 図 阿志岐古墳群の周辺遺跡 (1:50000)

第 1 序 説

1. は じ め に

昭和45年度分として福岡県教育委員会から依頼された筑紫野市全域における遺跡の分布調査実施中に、今回発掘調査を行なった。宮地岳古墳群に属する阿志岐地区古墳群の一画が、工事によって破壊され始めているのを発見した。

工事は、現場近くを流れる宝満川縁の道路を拡張するために土砂を採集していたものであり、工事開始以来、数日を過ぎていた。

そこですぐに分布調査員（町から委託された地域住民有志と大学生，中学生を中心とする。）が、埋蔵文化財保護の立場から工事関係者に対し、中止を要求した。それと同時に県の文化課に連絡を取り、今後の指示をとる一方、役場内で工事関係者と交渉を重ねたが、工事日数との関係上中止するという要求は受け入れられず、市教育委員会にとっても初めてのことであり、どのように対処すべきか結論も出なかった。

その間も工事は進められ、現場の状況から見て、すでに二～三基の古墳が破壊されており、もう一基も半分が破壊されそうで、それについては土砂取りをなるべく古墳より離れて行なってもらった。

数日後、県の調査員が来られて、県の条例等を示した交渉の結果、工事の中止が決定した。しかし、期限付きの暫定的なもので、その間に調査を済ませるという内容のものであった。本来ならばそのまま保存すべきであると考えていた地域であるが、すでに工事が始まっており、このままではもう一基も破壊される点を考慮して現在残っている古墳を記録して残すことを目的とし調査の実施を決定した。この間、学生だけの調査などと、新聞紙上で指摘されたが、学生の方ではどうにもならず、調査担当の責任者の問題など多くの苦勞を要した。

調査内容については、本報告書に示すごとくである。なお、発掘調査期間中に阿志岐地区の人々に古墳に関する映画会を開催したりして多くの人に発掘現場を見学していただいた。

今回の場合、筑紫野市にとって初めてのことであり、今後の展開についても大きな問題であった。この点については、以後工事等に対しては遺跡地図等を参考にして極力遺跡破壊を免れるように体制を整えることなど、埋蔵文化財保護に対する意識が高まったのは、大きな成果であった。

今回のように当市に限らず各自治体に文化財に携わる専門職員がおらず、体制も確立していないのが実情ではないかと思われる。また、工事のあとの緊急調査では学問上の問題点を把握することもできない。これらの点をどのように整えていくのか早急に解決しなければならない問題である。

中央の最上部からの確立よりも、まず各自治体の文化財に対する体制を確立し、意識を高めることの方が、より一層の進展を見ることは明らかなことであり、そのための指導が進められることを望むものである。

一例ではあるが、ここに記し、関係者各位の再考を願う。

（立松 彰）

2. 調査の経過（日誌）

4月1日 晴

午前中に、武蔵寺井上住職の手によって供養を行なう。午後より、古墳の墳丘に東西南北にトレンチを設定する。また、国道甘木線の宝満橋付近の水準点（34.3m）より、原点を移し、墳丘頂部に60.33mのBMを設定した。

4月2日 晴

3号墳を50分の1で墳丘測量を始める。それと併行して、各トレンチの掘り下げを行なった。本日中に、羨道部の方向と、側壁の一部を確認した。

4月3日 晴

3号墳は、石室の主軸を東西に持ち、横穴式であることを確認した。土取によって、崖面に出ている黒色の落ち込みを見るため、5トレンチを設定する。古墳周辺の地形測量を200分の1で始め、1/3ほど終了する。

4月4日 晴

石室内部に落下していた天井石を、チェーンブロックを用いて持ち上げ石室内部を清掃したところ、ガラス小玉、鉄剣、鉄鏃が出土した。各トレンチは、地山まで掘り下げを終了した。

4月5日 晴

石室内部の清掃を続行、ガラス玉の出土が多くなる。各トレンチの土層の写真撮影終了。山陵裾部に6トレンチを設定、掘り下げた結果、表土下から、石斧、石鏃が出土する。

4月6日 晴

石室の実測に取りかかる。平面図、玄門立面図作成。各トレンチの土層図作成。5トレンチで方形プランの遺構が現われる。6トレンチでは、丹塗の土器が多く出土する。本日作業終了後、部落の人達を集め、公民館において、説明会と、文化財関係の映画会を行なう。参加人員60名。

4月7日 晴

石室の平面図作成、敷石上面より、鉄鏃、ガラス玉が出土。各トレンチの土層図は完成する。5トレンチでは、方形の住居址と考えられ、焼土ブロック、焼けた石、縄文晩期の土器が出土した。6トレンチからは、大型の器台が出土した。地形図はほぼ完成した。

4月8日 雲り時々小雨

石室の写真撮影を行ない、内部の実測に取りかかる。4トレンチにおいて、墓道部が確認できた。5トレンチでは前日に引き続いて掘り下げ、ピットが見つかり、土器が出土した。遺跡の遠景の撮影を行なう。

4月9日 小雨のち晴

石室の実測を継続、本日でほぼ完成する。5トレンチでは、平面図、断面図を作成完了。6トレンチでは、埋めもどしを行なう。

4月10日 晴

石室内部の敷石をとりのぞいた結果、敷石の間より、ガラス小玉が多く出土した。そのため、清掃に時間がかかる。墓道部を掘り下げ、土層図、平面図を作成。5トレンチの住居址の清掃後写真撮影を行なう。

4月11日 晴

主体部の実測はすべて午前中に終了。午後より図面を照合後、器材の点検を始め、機材を梱包後、阿志岐公民館を撤去する。

（佐藤 保雄）

3. 位置と環境

阿志岐古墳群A群3号墳、阿志岐シメノグチ遺跡は、福岡県筑紫野市大字阿志岐字シメノグチに所在する。

筑紫野市は、福岡市の南部、福岡平野の南端にあり、福岡平野と筑紫平野を結ぶ中心地である。平野部は、宝満山塊、背振山塊より派出して来た山陵によって最も狭い部分となっており、そのため、古代からの交通の要所である。

筑紫野市の南部には、筑紫平野を貫流して筑後川に注ぐ宝満川が流れており、上流から下流にかけて、両岸に肥沃な水田地帯を形成している。宝満川の中流東側にある宮地岳（337m）の山麓には、正確な調査は行なわれていないが、推定数百基におよぶ古墳群があるといわれている。古墳のほとんどが群集して、古墳群を形成している（註1）。

阿志岐古墳群は、宮地岳の西側山麓にあり、平野部に向かって派生している山陵の尾根に構築されている。

阿志岐古墳群は、4つのグループに分けることができる。「A群（10基）は、阿志岐小学校の南側尾根」。「B群（20基）は阿志岐小学校東側の尾根」。「C群（7基）は、B群の北側の尾根」に築かれており、総計43基が存在する。未確認を含めると相当数の古墳群となる。

遺跡の周辺には、先土器時代から、歴史時代にかけての遺跡が多く、先土器時代の遺跡として永岡常松遺跡（註2）、針摺野黒坂遺跡（註3）などがあり、縄文時代の遺跡としては、常松遺跡、針摺下石仏遺跡（註4）、吉木小賀谷遺跡（註1）をあげることができる。めぐまれた水田地帯のため、弥生時代の遺跡は多く、合口甕棺により前漢鏡の内行花文星雲鏡、細形銅剣1口が発見された二日市峰遺跡。住居址、貯蔵穴が発見された。針摺野黒坂遺跡、太宰府町高雄遺跡（註5）、永岡常松遺跡などがあげられる。その他、昭和46年度分布調査によって、数十カ所の遺跡が判明している。

古墳時代は、全市に古墳が分布しており、分布調査では、149基確認されている。その中で最も古い時期の古墳は、前方後円墳で内部主体に粘土槨をもち、三角縁神獣鏡など鏡を3面出した、武蔵の原口古墳（註6）をあげることができる。そのほかには、古式の古墳は発見されていない。しかし、後期になると、装飾古墳で有名な五郎山古墳があるが、他の古墳は、ほとんどが群集墳である。阿志岐古墳群、天山古墳群、塚口古墳群、隣接する朝倉郡夜須町の砥上山山麓には、数百基の、森原、砥上、吹田などの古墳群（註7）がある。

歴史時代には、大宰府関係の遺跡が多く、大宰府より肥前、肥後を結ぶ延喜式古道、その古道ぎわに建つ式内社の筑紫神社。大宰府より米ノ山峠を越えて、飯塚方面へぬける古道、その古道ぎわにあり、万葉集に歌われた芦城駅などがある。分布調査においても、阿志岐付近の微高地から、多くの歴史時代の遺物が採集された。

このように、市内全域に各時代の遺跡が存在する筑紫野市は、今後、多くの調査、研究によって、古代史解明の面で、重要な位置を占めるであろう。

（赤崎 敏男）

註1 昭和46年度分布調査による。

2 賀川光夫外「常松遺跡調査報告書」（別府大学考古学研究报告書1）昭和45年

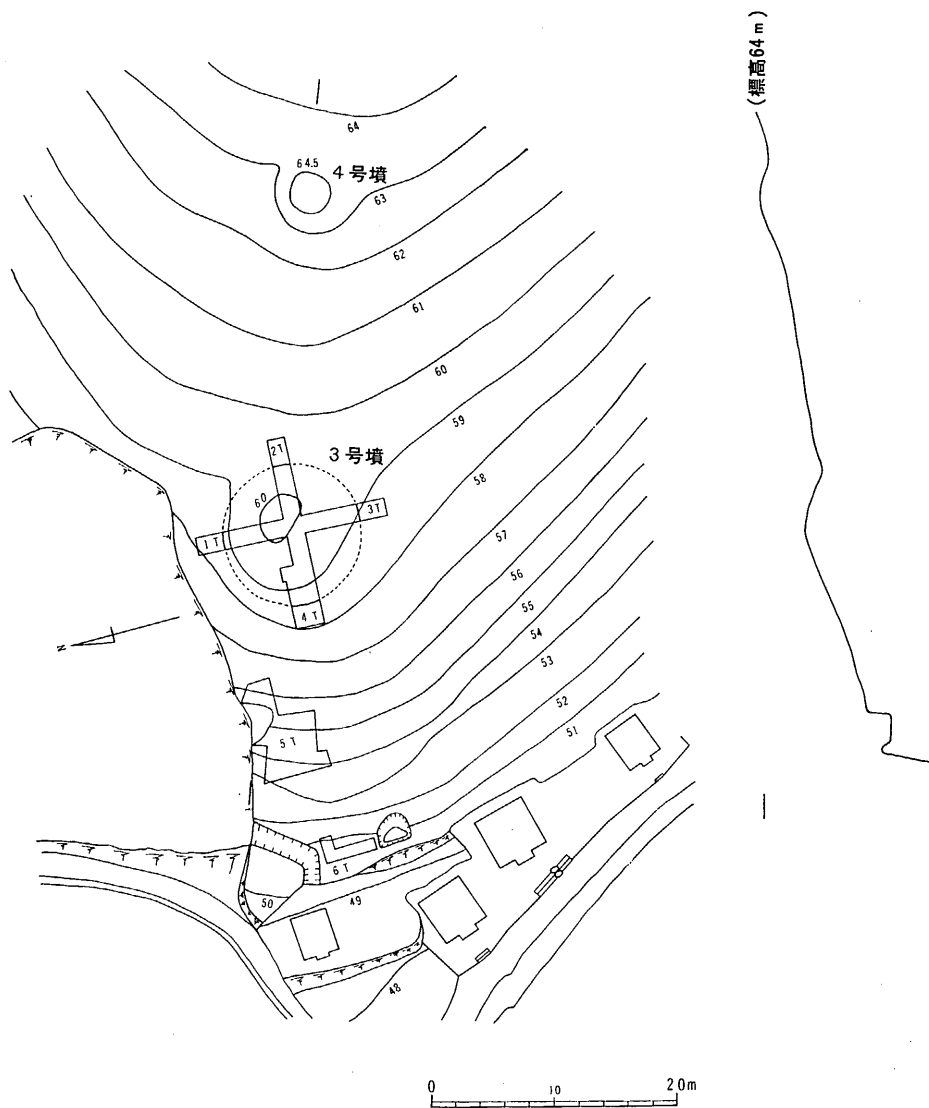
3 「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告」（福岡県教育委員会）昭和45年

4 中原志外「福岡県筑紫郡針摺出土の縄文式土器」九州考古学2 昭和32年

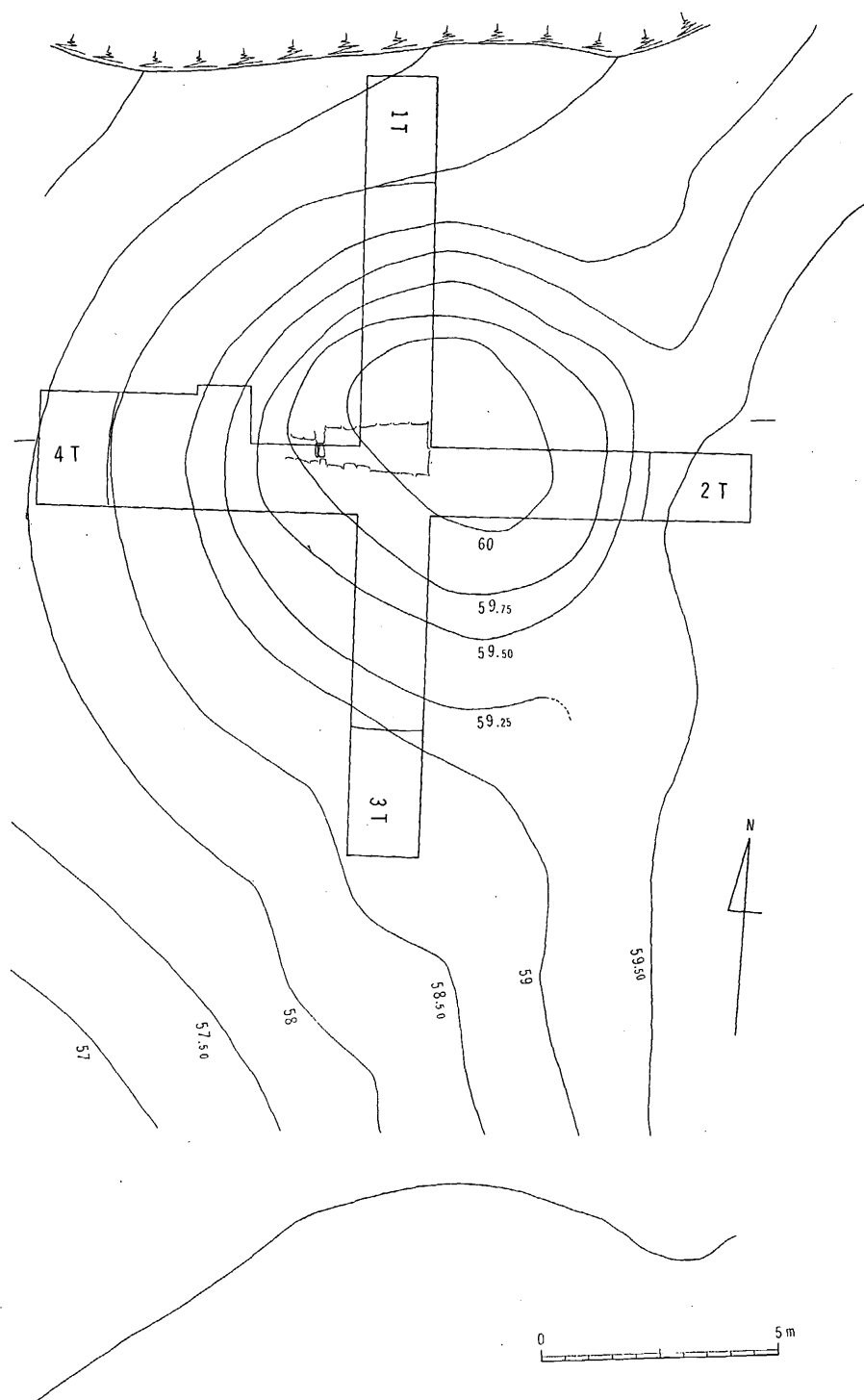
5 県教育委員会の調査による。

6 島田寅次郎「異例の古墳」（福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書10）昭和10年

7 朝倉高等学校編「埋もれていた朝倉文化」昭和44年



第 2 図 周 辺 地 形 図



第 3 图 A 群 3 号 墳 地 形 图

第 2 古墳の構造と出土品

1. 墳 丘

A群（10基）は、阿志岐小学校の南側山陵の尾根に築かれている。3号墳は、A群の中でも最も西側で、尾根が平野部に向かって下降する突端の、標高60m前後のところに位置する。3号墳の東側15mの所には、4号墳が築かれている。

墳丘は、東西直径約8.5m、南北約10.5m、高さ約1.3mの円墳で、墳丘は低い。

墳丘の東側（尾根上方）は、尾根の丘尾を約1mほど切断しており、墳丘周囲も地山を削って、墳丘をきわだたせるようにしている。

調査の結果、周囲を削って、地山に段があるが、これは、古墳築造時の墳丘と思われる。それによると、古墳は、東西直径約7.5m、南北約12mである。

石室は、地山を削って墳を掘り込み、石室を築きながら、墳丘を盛っている。

盛土は、地山に最高約1m前後で盛られ、黄褐色土層、黒色土層が、整った形で混じっている。この土は、墳丘周囲を削ったときのものを盛ったのであろう。

墳丘西側（4T）には、墓道が現われており他の土層とは異なって茶褐色土層が一層のみであって、断面はU字型をなしている。墓道は一部地山を浅く掘り込んで、横口部の入口まで達しており追葬の可能性も考えられる。

2. 内 部 主 体（石室）

石室は単室の横穴式石室で、その形態は、玄室部に横口を取り付け、横口部の外の両側に約70cmの石積の施設がある。いわゆる、堅穴系横口石室と呼ばれる石室である。

石室は墳丘のほぼ中央にあり、ほぼ真西（W3°S）に開口している。

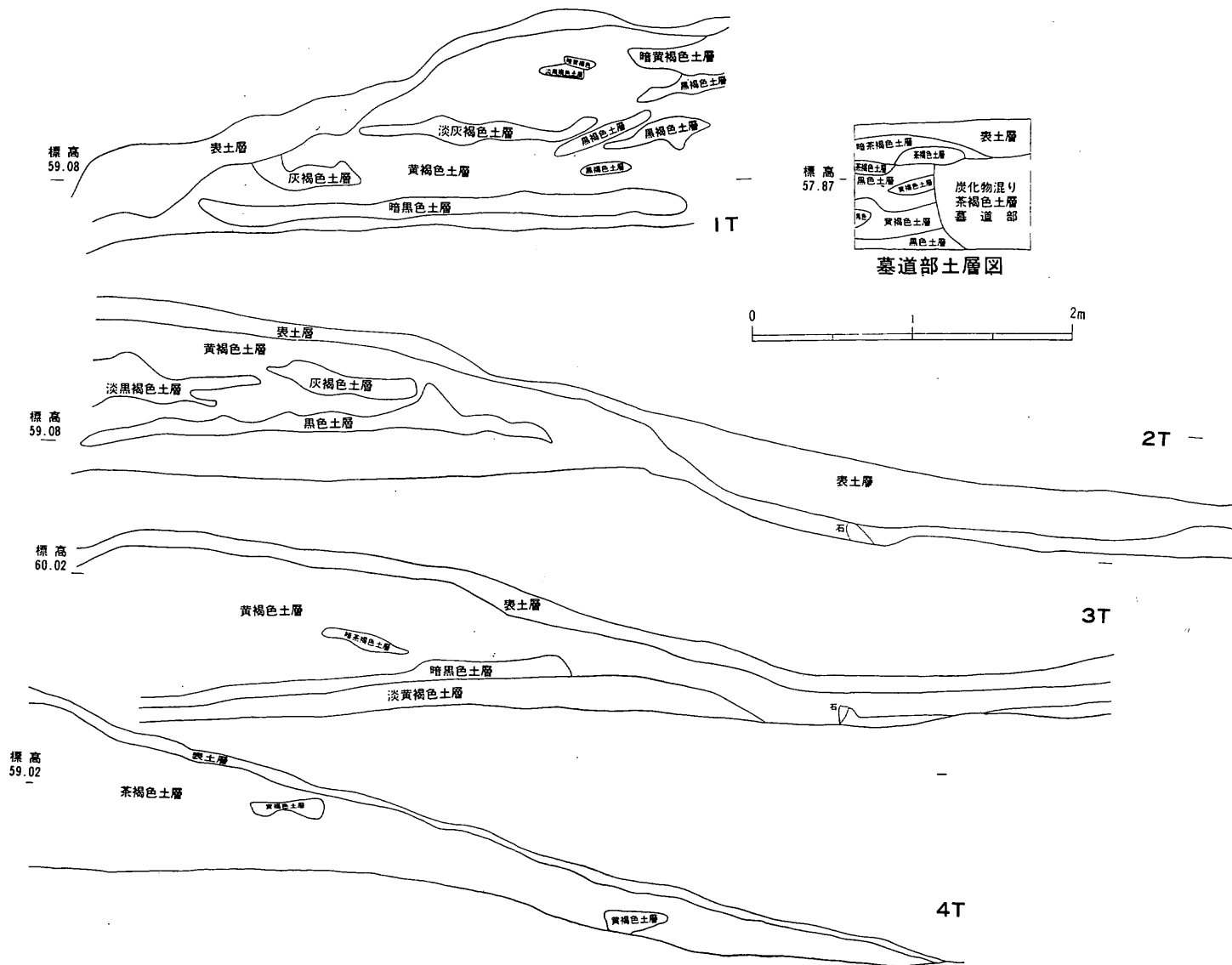
石室はすでに南側からの盗堀によって、側壁が一部破壊されており、天井石も横口部天井石を省いては、すべて落下していた。しかし天井石は、遺物の残りぐあい、敷石の状態より盗堀前にすでに落下していたと考えられる。

天井石の構築は、落下していた石材が荒く、比較的小さいので、横口部天井石に、やや扁平な石材をのせ、石室上部は、やや大きな石を持送くりにして、その上に大きな石を構築させ、すきまを塊石で包み込んだような構造であったと思われる。

石室内部の構造は、長さ2.3m、奥壁部幅1m、横口部付近幅1mの長方形プランである。床面には、全面にわたり比較的広い平石が敷かれ、その間をうめるように小礫石が敷かれている。

奥壁は、2枚の扁平な石を腰石として立て、その上に、小さな扁平の石や、形のととのった塊石で平積にしており、すきまのところに、小塊石をつめている。

北側壁は、約30cm～40cmの扁平な石を6枚腰石として立て、その上に、比較的扁平な石や大きな塊石をやや持送式に積み、すきまには、小塊石をつめている。



第4図 墳丘(断面図)

南側壁は、約 $\frac{1}{2}$ が盗堀にあって、壁が破壊されているが、北壁と同様、約30cm～60cmの扁平な石を6枚腰石として立て、その上に、比較的大きく扁平な石や、塊石をやや持送式にして積み、すきまには、小塊石をつめ込んでいる。

横口部は、左右1個の大きな袖石によって作られ、その上に数個の塊石を2段につめ、巨大な平石を構築させて、横口部の天井部としている。

床は、袖石ではさまれた部分に、長さ40cm、幅30cmの平たな敷屋石があり、石室床面より、6cm高い。横口部の幅は約40cm、高さは約70cmを計る。

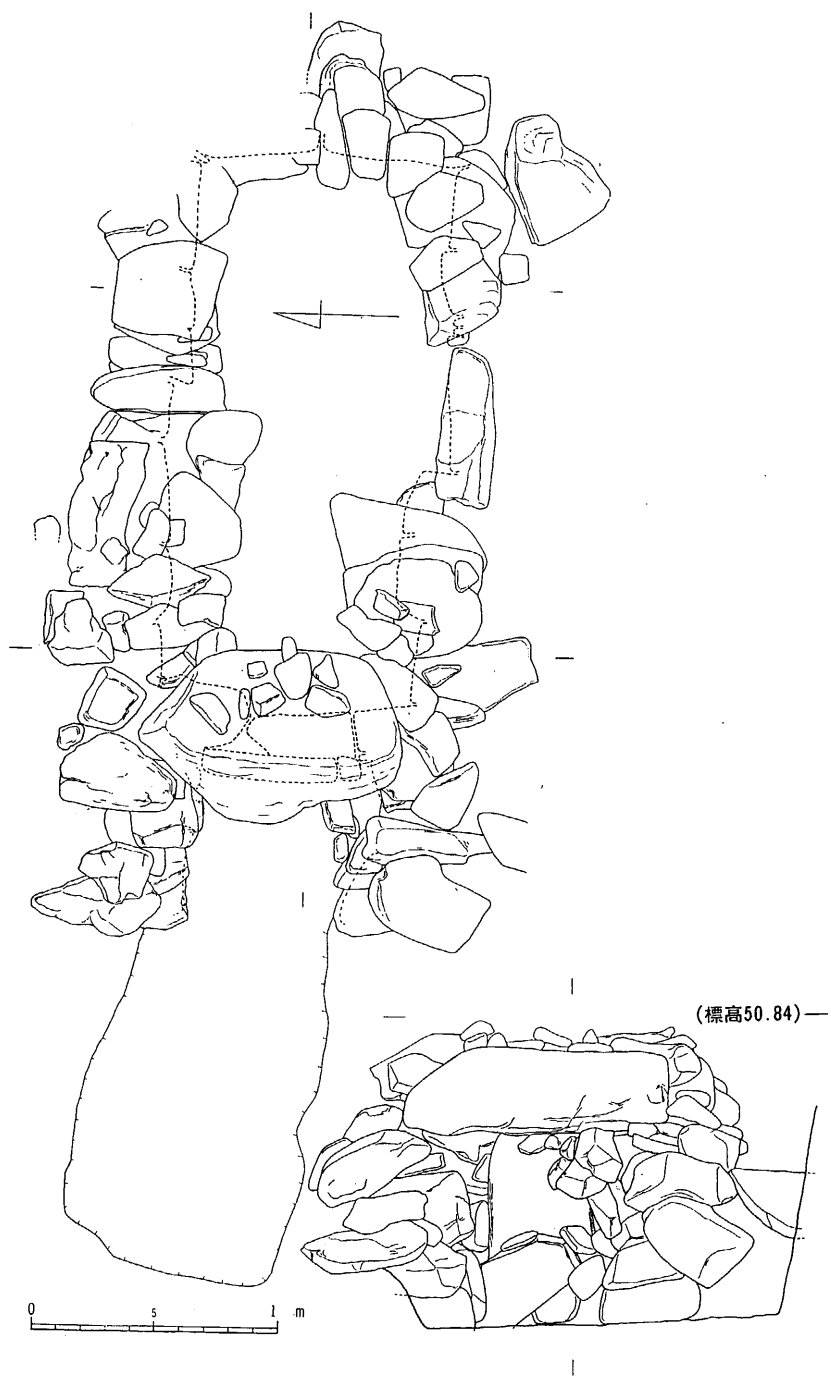
閉塞部は未開口であったため、旧状をよくとどめていた。

閉塞は、まず、長さ約70cm、幅約40cmの方形の整った板状扉石を、天井と敷屋石にかませて横口部をとざし、すきまの部分に、小塊石をつめこみ、次に扉石の下部に倒れないように、平石や、塊石を積んでいる。

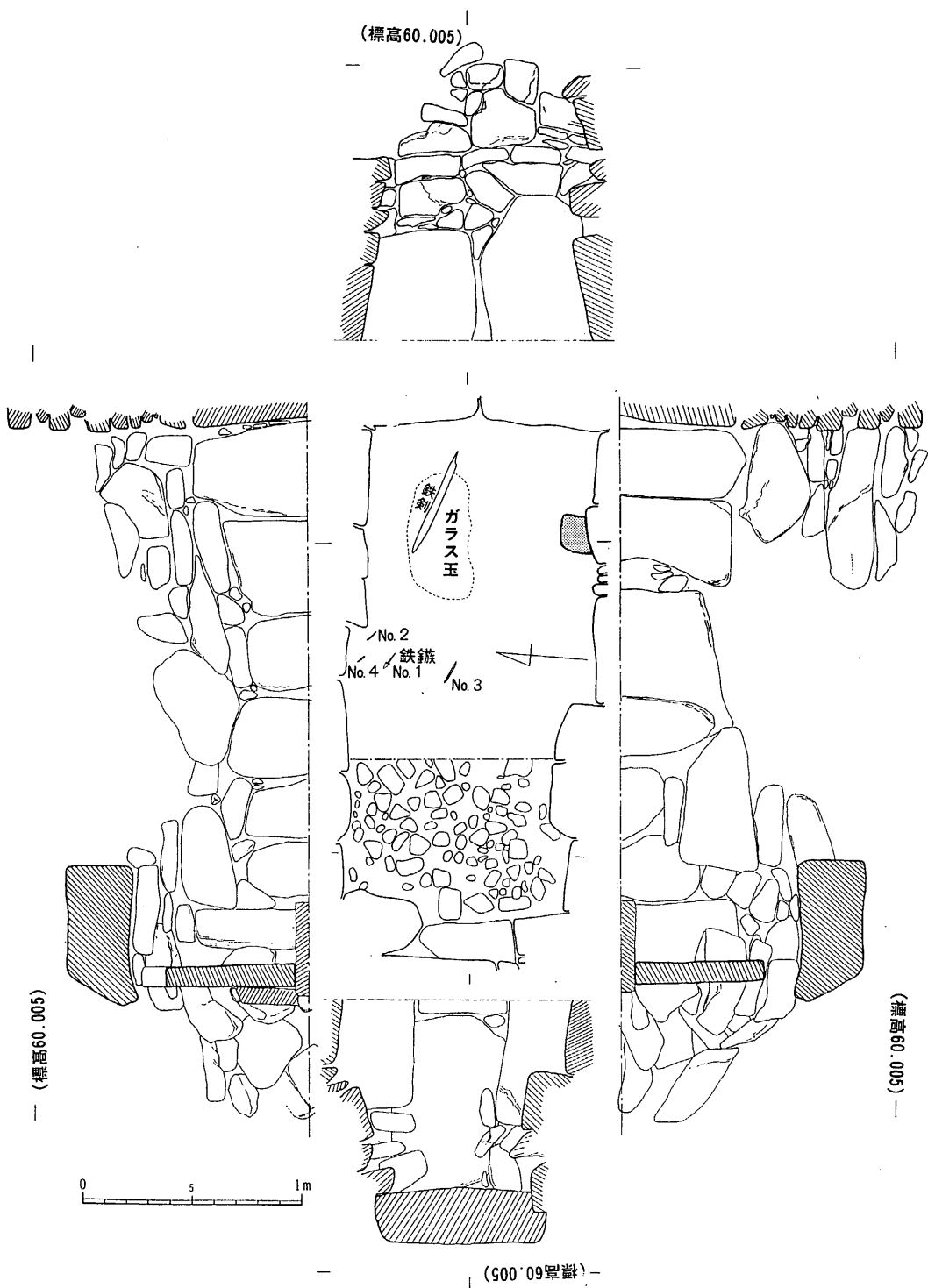
前庭部には、両側に比較的大きな塊石を積み、袖垣にして、横口部より約70cmほどのびて、羨道を形成している。幅は、横口部付近で幅約50cm、先端部で幅約80cmで「ハ」字形に開く、袖垣の高さは横口部より先端部に行くにしたがって低くなり、横口部では高さ約70cm、先端部高さ約40cmである。また、石積の羨道部は、素堀の墓道部に続いており、地山に堀りこまれた、浅い幅約80cm、深さ約10cmの墓壙が、横口入口まで達している。

石室に使用されている石材は、そのほとんどが、付近に産する花崗岩を用いている。

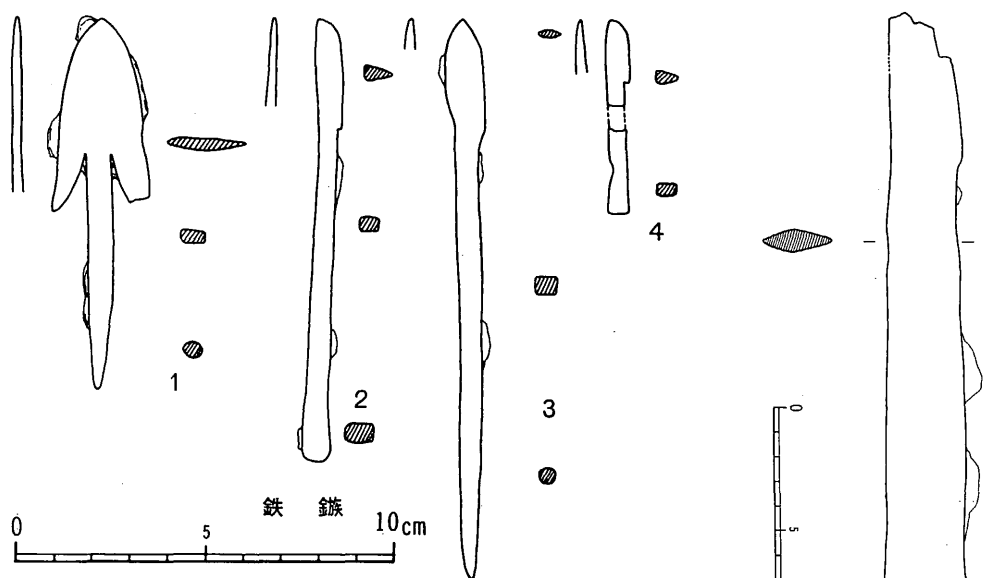
最後に注意をすべき点は、南側側壁の奥壁寄の一部分に朱が存在した点である。他の部分にはまったく見うけられなかった。朱の範囲も狭く量も少ない。



第 5 図 石室平面図，閉塞部



第 6 図 石室実測図, 遺物出土状態



第 7 図 石室内出土遺物

3. 石室内出土遺物（第 7 図）

鉄 剣（4）

先端部を欠いているが、現存している刃わたり 36 cm，刃巾先端部で 3 cm，茎付近で 3.5 cm，厚さ 1 cm である。鑄は不明瞭で丸味をおびている。茎長は 13 cm でやや彎曲する。茎には目釘穴が 2 つあり目釘穴の木質部の繊維は縦方向に走っており，目釘の材質として木製の目釘が用いられたことが判明した。剣身には鞘の木質が付着して残っている。

鉄 鏃（1，2，3，4）

3 種類の鉄鏃に分けることができる。（1）は広根式で，逆刺を持っている。長さ 10 cm，幅は開部で 2.5 cm，厚さ 0.4 cm で一部逆刺部を欠損している。（2）は細根式で，鋒は刀身形を呈する。刀身にはわずかに逆刺がある。長さ 12 cm，厚さ 0.4 cm である。（3）は細根式で柳葉形を呈する。長さ 15 cm，先端部幅 1 cm，厚さ 0.3 cm。（4）は細根式でほかの 3 本に比べて小型である。鋒は刀身形を呈し，刀身には，わずかに逆刺がついている。全体の長さは不明で，厚さ 0.3 cm である。

ガラス小玉（第 1 表）

総計 273 個が発見され，色はグリーン，コバルトブルー，ホワイトブルー，ダークグリーン，グリーン，ホワイトグリーンの 6 種類が見られる。すべてガラス製である。大きさは，最も大きなものが直径 0.81 cm，厚さ 0.68 cm，穴径 0.17 cm で，ほかの小玉に比べて目だって大きい。そのほかの小玉は平均して直径 0.3～0.4 cm，厚さ 0.2～0.3 cm，穴径 0.1 cm 前後のものが最も多い。小玉の中では普通の大きさである。

鉄 剣

第 1 表

ガ ラ ス 玉 計 測 値

No.	直径 (cm)	厚さ (cm)	穴径	色	備考	No.	直径 (cm)	厚さ (cm)	穴径	色	備考	No.	直径 (cm)	厚さ (cm)	穴径	色	備考
1	0.54	0.46	0.15	C. B		48	—	—	—	C. B	破片	95	0.48	0.37	0.08	C. B	
2	0.53	0.35	0.16	C. B		49	0.37	0.14	0.1	C. B		96	0.34	0.22	0.07	C. B	
3	0.49	0.47	0.17	C. B		50	0.3	0.16	0.05	C. B		97	0.57	0.38	0.15	C. B	
4	0.4	0.29	0.07	C. B		51	0.35	0.29	0.08	B		98	0.45	0.3	0.1	C. B	
5	0.48	0.26	0.1	C. B		52	0.33	0.13	0.07	C. B		99	0.58	0.36	0.18	C. B	
6	0.6	0.5	0.1	C. B		53	0.35	0.15	0.12	C. B		100	0.5	0.47	0.1	G	
7	0.52	0.4	0.14	C. B		54	—	—	—	B	破片	101	0.37	0.2	0.1	C. B	
8	0.43	0.23	0.07	D. G		55	0.3	0.28	0.05	W. G		102	—	—	—	B	破片
9	0.4	0.37	0.07	B		56	0.33	0.22	0.05	W. G		103	0.4	0.27	0.1	C. B	
10	0.32	0.17	0.07	B		57	0.34	0.22	0.08	C. B		104	—	—	—	B	破片
11	0.4	0.33	0.05	B		58	0.4	0.33	0.12	B		105	0.38	0.25	0.08	B	
12	0.38	0.3	0.08	B		59	0.47	0.33	0.1	B		106	0.35	0.25	0.08	G	
13	0.57	0.36	0.27	W. B		60	—	—	—	B	破片	107	0.3	0.23	0.06	G	
14	0.54	0.37	0.17	C. B		61	—	—	—	B	破片	108	0.32	0.19	0.07	C. B	
15	0.4	0.24	0.09	B		62	0.42	0.24	0.12	C. B		109	0.38	0.36	0.08	B	
16	0.45	0.37	0.17	C. B		63	0.32	0.16	0.08	C. B		110	0.38	0.3	0.1	B	
17	0.34	0.37	0.06	C. B		64	0.4	0.38	0.08	C. B		111	0.37	0.22	0.11	B	
18	0.31	0.16	0.08	B		65	—	—	—	B	破片	112	0.39	0.34	0.06	C. B	
19	0.32	0.38	0.04	B		66	0.33	0.27	0.08	C. B		113	0.27	0.29	0.05	B	
20	0.33	0.19	0.08	C. B		67	0.32	0.22	0.08	B		114	0.27	0.2	0.04	B	
21	0.35	0.23	0.06	B		68	—	—	—	B	破片	115	—	—	—	B	破片
22	0.37	0.28	0.08	C. B		69	0.32	0.19	0.1	C. B		116	—	—	—	B	破片
23	0.34	0.19	0.05	B		70	—	—	—	B	破片	117	—	—	—	B	破片
24	0.4	0.25	0.09	C. B		71	0.35	0.3	0.07	C. B		118	0.48	0.41	0.08	C. B	
25	0.31	0.19	0.05	B		72	0.28	0.15	0.08	C. B		119	0.35	0.37	0.1	C. B	
26	0.6	0.4	0.12	B		73	0.37	0.32	0.1	C. B		120	0.81	0.68	0.17	C. B	最大
27	0.53	0.33	0.09	W. B		74	—	—	—	B	破片	121	0.53	0.27	0.1	C. B	
28	0.36	0.21	0.6	C. B		75	0.32	0.2	0.09	B		122	0.42	0.38	0.9	W. G	
29	0.4	0.17	0.11	B		76	0.44	0.43	0.11	D. G		123	0.66	0.3	0.16	B	
30	0.33	0.3	0.05	B		77	0.5	0.26	0.08	C. B		124	—	—	—	W. B	破片
31	0.27	0.28	0.05	C. B		78	0.3	0.32	0.07	C. B		125	0.43	0.26	0.08	C. B	
32	0.36	0.24	0.11	W. G		79	0.38	0.24	0.08	W. G		126	0.43	0.3	0.08	C. B	
33	0.32	0.34	0.08	W. G		80	0.36	0.34	0.08	C. B		127	0.42	0.25	0.13	B	
34	0.44	0.43	0.15	C. B		81	0.34	0.2	0.05	C. B		128	0.33	0.23	0.05	W. B	
35	0.4	0.22	0.11	W. G		82	0.37	0.18	0.09	C. B		129	0.43	0.3	0.16	B	
36	0.32	0.3	0.06	W. B		83	—	—	—	C. B	破片	130	0.55	0.25	0.13	C. B	
37	0.38	0.4	0.07	B		84	0.34	0.25	0.04	W. G		131	0.33	0.3	0.06	B	
38	0.34	0.21	0.08	C. B		85	0.43	0.28	0.07	C. B		132	0.49	0.26	0.1	C. B	
39	—	—	—	B	破片	86	0.3	0.24	0.06	W. G		133	0.46	0.4	0.17	B	
40	0.3	0.31	0.05	C. B		87	0.4	0.29	0.08	C. B		134	0.42	0.32	0.1	C. B	
41	0.33	0.23	0.08	C. B	一部欠	88	0.32	0.18	0.06	B		135	0.38	0.2	0.07	W. B	
42	—	—	—	B	破片	89	—	—	—	C. B	破片	136	0.42	0.38	0.1	C. B	
43	0.32	0.16	0.05	C. B		90	0.4	0.31	0.12	B		137	0.46	0.43	0.1	D. G	
44	0.52	0.35	0.1	B		91	0.33	0.35	0.09	C. B		138	0.45	0.4	0.1	B	
45	0.34	0.25	0.06	C. B		92	0.32	0.3	0.07	C. B		139	0.45	0.31	0.1	C. B	
46	0.28	0.13	0.07	C. B		93	0.53	0.26	0.1	B		140	0.4	0.36	0.08	C. B	
47	0.31	0.19	0.07	C. B		94	0.47	0.38	0.12	C. B		141	0.44	0.33	0.05	B	

No.	直径 (cm)	厚さ (cm)	穴径	色	備考	No.	直径 (cm)	厚さ (cm)	穴径	色	備考	No.	直径 (cm)	厚さ (cm)	穴径	色	備考
142	—	—	—	C. B	破片	186	0.41	0.28	0.11	B		230	0.3	0.17	0.04	C. B	
143	0.28	0.28	0.04	C. B		187	0.29	0.18	0.07	W. G		231	0.26	0.16	0.05	C. B	
144	0.52	0.36	0.2	W. G		188	—	—	—	C. B	破片	232	—	—	—	C. B	破片
145	0.45	0.28	0.1	C. B		189	—	—	—	B	破片	233	0.3	0.15	0.08	B	
146	0.52	0.37	0.13	C. B		190	0.27	0.15	0.06	C. B		234	0.44	0.27	0.08	B	
147	0.35	0.23	0.06	B		191	0.39	0.27	0.06	B		235	0.33	0.2	0.08	C. B	
148	0.52	0.4	0.13	C. B		192	0.26	0.18	0.04	B		236	—	—	—	B	破片
149	0.41	0.45	0.07	C. B		193	0.32	0.18	0.06	C. B		237	—	—	—	B	破片
150	0.5	0.46	0.09	D. G		194	0.32	0.21	0.05	C. B		238	0.41	0.19	0.06	B	
151	0.48	0.35	0.1	C. B		195	—	—	—	B	破片	239	—	—	—	B	破片
152	—	—	—	C. B	破片	196	0.3	0.17	0.07	B		240	0.46	0.34	0.1	W. B	
153	0.3	0.15	0.1	C. B		197	0.42	0.28	0.1	B		241	—	—	—	B	破片
154	0.31	0.22	0.05	C. B		198	0.35	0.28	0.07	C. B		242	0.48	0.38	0.1	W. B	
155	0.46	0.33	0.08	C. B		199	0.4	0.26	0.12	B		243	0.47	0.26	0.1	C. B	一部欠
156	—	—	—	G	破片	200	0.3	0.15	0.07	B		244	0.55	0.28	0.18	C. B	
157	0.27	0.22	0.05	C. B		201	0.4	0.32	0.08	B		245	0.42	0.29	0.1	B	
158	—	—	—	G	破片	202	0.34	0.2	0.05	B		246	0.45	0.25	0.1	B	
159	0.46	0.25	0.16	C. B		203	0.33	0.21	0.08	B		247	0.46	0.3	0.1	B	
160	0.4	0.33	0.07	B		204	0.32	0.17	0.06	B		248	0.3	0.27	0.05	C. B	
161	0.32	0.22	0.06	B		205	—	—	—	B	破片	249	—	—	—	B	破片
162	0.45	0.52	0.15	W. B		206	0.47	0.24	0.11	B		250	0.42	0.28	0.05	W. B	
163	0.34	0.23	0.06	B		207	0.24	0.17	0.05	B		251	—	—	—	B	破片
164	0.53	0.32	0.09	B		208	0.3	0.17	0.09	B		252	0.4	0.25	0.07	C. B	
165	0.3	0.16	0.05	C. B		209	0.43	0.27	0.09	C. B		253	0.4	0.3	0.08	C. B	
166	0.38	0.4	0.05	C. B		210	0.39	0.25	0.1	B		254	0.5	0.29	0.1	B	
167	0.28	0.15	0.04	B		211	—	—	—	B	破片	255	—	—	—	B	破片
168	0.42	0.34	0.1	C. B		212	0.35	0.23	0.08	C. B		256	0.51	0.32	0.16	C. B	
169	—	—	—	B	破片	213	0.34	0.35	0.09	B		257	0.3	0.14	0.06	C. B	
170	—	—	—	B	破片	214	0.25	0.13	0.04	C. B		258	0.25	0.24	0.04	W. B	
171	0.48	0.6	0.11	W. B		215	0.25	0.13	0.03	B		259	0.38	0.2	0.05	W. B	
172	0.57	0.37	0.11	B		216	0.4	0.22	0.07	C. B		260	0.37	0.17	0.09	W. B	
173	—	—	—	B	破片	217	0.35	0.28	0.06	C. B		261	0.05	0.27	0.1	C. B	
174	0.31	0.22	0.06	B		218	0.34	0.3	0.04	C. B		262	—	—	—	B	破片
175	0.3	0.22	0.08	B		219	0.28	0.23	0.3	B		263	0.5	0.37	0.13	B	
176	0.27	0.24	0.05	C. B		220	0.33	0.23	0.08	C. B		264	—	—	—	B	破片
177	0.3	0.13	0.09	C. B		221	0.28	0.2	0.05	C. B		265	0.58	0.35	0.1	C. B	
178	0.55	0.29	0.15	C. B	一部欠	222	0.4	0.24	0.07	W. G		266	0.47	0.33	0.1	C. B	
179	0.46	0.39	0.13	C. B		223	0.37	0.33	0.04	C. B		267	0.35	0.3	0.08	C. B	
180	—	—	—	B	破片	224	0.27	0.34	0.06	C. B		268	—	—	—	C. B	破片
181	—	—	—	B	破片	225	0.28	0.24	0.04	C. B		269	0.3	0.19	0.04	B	
182	0.3	0.27	0.06	B		226	0.35	0.28	0.06	C. B		270	0.35	0.28	0.05	C. B	
183	0.5	0.37	0.11	W. G		227	0.4	0.17	0.08	B		271	0.3	0.26	0.04	B	
184	0.48	0.38	0.1	W. G		228	0.3	0.21	0.06	B		272	0.31	0.2	0.14	W. G	
185	—	—	—	C. B	破片	229	—	—	—	B	破片						

単位は (cm)

C. B (コバルトブルー)

B (ブルー)

D. G (ダークグリーン)

G (グリーン)

W. B (ホワイトブルー)

W. G (ホワイトグリーン)

4. 墳丘出土遺物（第8図）

土 器（1～3）

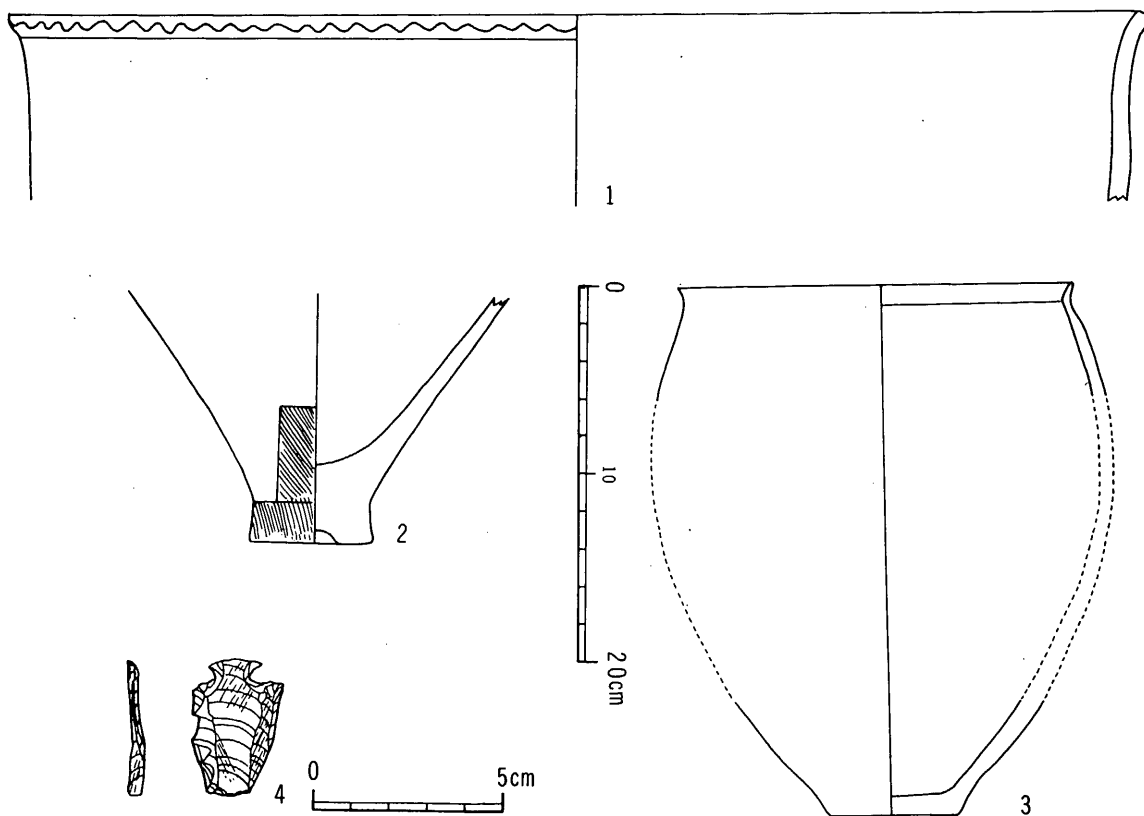
（1）は甕形土器の口縁部破片であり、直径は約60cmある。口縁部は肥厚しており、肥厚した部分に波形に施された細かな隆起文がめぐっている。胎土には砂を多く含み、焼成は良くない。この種の土器は他に類例を見ることはできない。

（2）は1トレンチ墳丘内より出土した甕形土器の底部である。底部はややあげ底をなすもので、厚みがある。外面は底部にかけてクシ目状用具で整形された痕が残っている。胎土中には砂をやや多く混じえ、焼成も良くない。色は茶褐色である。

（3）は甕形土器である。短いやや直立した口縁部で、口縁部内側は「く」の字状に折れる。胴部、底部の部分が残っており、口縁部直径は約20cmで、胎土には砂を含み、焼成は良くない。底部は平底である。

石 器（4）

（4）は古墳の墳丘から出土したもので、縦形の石匙である。黒曜石で作られており、つまみの両側に明瞭なノッチを持つ。（赤崎 敏男）



第8図 墳丘出土遺物

第 3 住居址と出土品

1. 住 居 址

A群3号墳の墳丘より、約15m下、標高55mの所にある。

土取りによって、一部断面を見せていたが、最初は、溝状遺構と考えていた。トレンチを拡張するにしたがって、溝でないことがわかり、プランの確認によって方形プランとなることがわかった。掘り下げたところ、土器片、炭化物が出土し始め、住居址と考えられた。また土器が縄文土器と思われ始め、浅鉢の口縁部が壁付近より出土したことにより、縄文期のものであることが判明した。

住居址は、土取りによって、全体のはほぼ半分を削られてはいるが、一辺が約2.4mの方形プランであることがわかった。

住居址は、地山の花崗岩バイラン土壌を切り込んで作られており、斜面が急なため、東側壁は床面から約1.5mあり、西側壁は約0.4mある。

各壁には、花崗岩の未風化の石が露出しており、住居址構築の際に、削ったものと考えられる。特に南側壁は、一部焼けた面が見うけられる。

床面の直上には、住居址全体に厚い灰層や、焼けた面が見られ、花崗岩の大小さまざまな塊石や焼けた粘土ブロックがあり、炭化物が多く見いだされた。塊石には火を受けたものも多く、石の一部が赤色に変化していた。

炭化物は、形としてとらえられるものは少なかったが、一部板状のものや、丸木状のものが見うけられた。

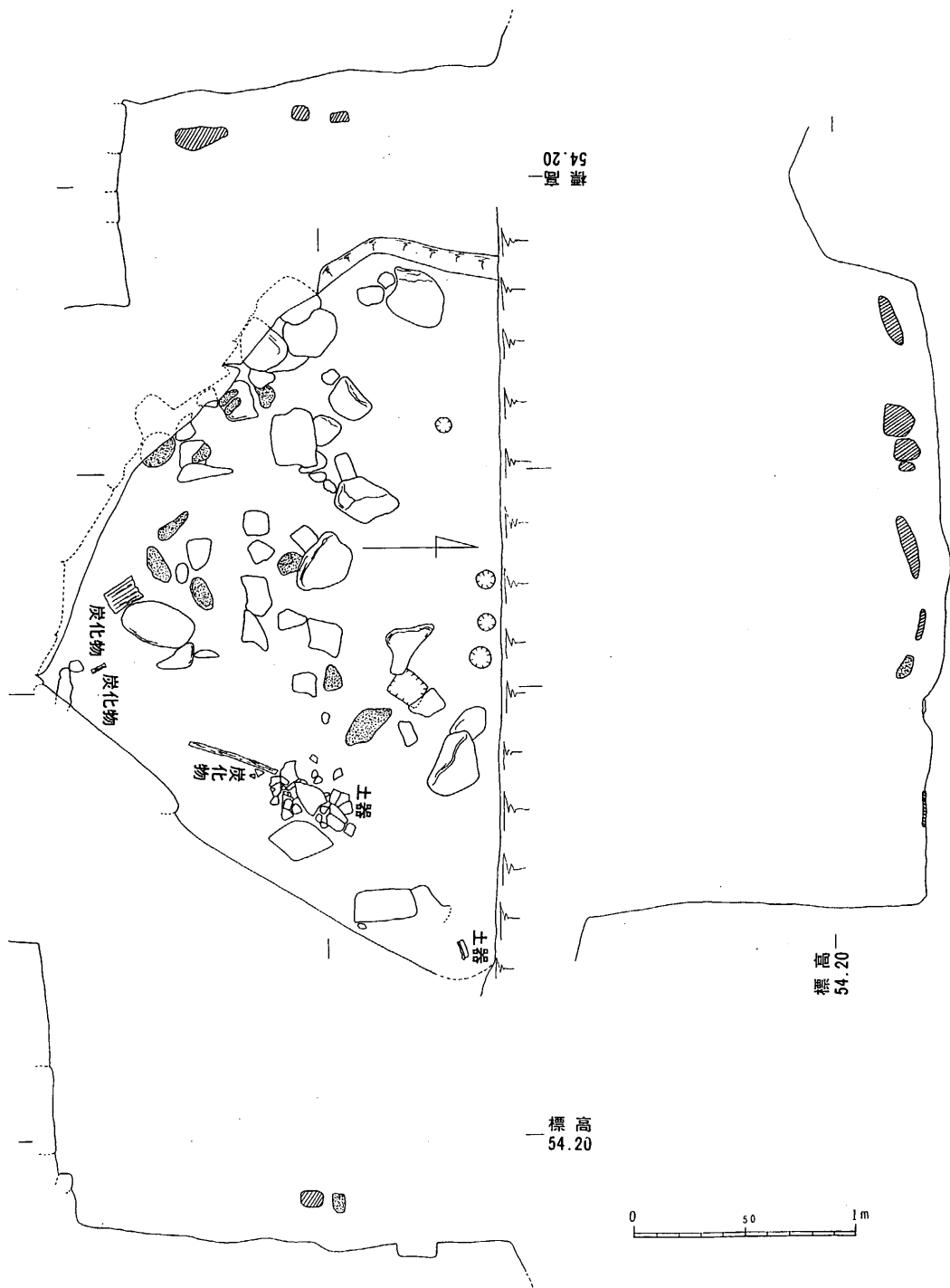
遺物は、覆土より、土器、石器が出土したが、そのほとんどが、破片であった。床面直上からは、甕形土器がつぶれた状態で出土し、東壁付近からは、浅鉢口縁部が出土した。

2. 遺 物 (第10図)

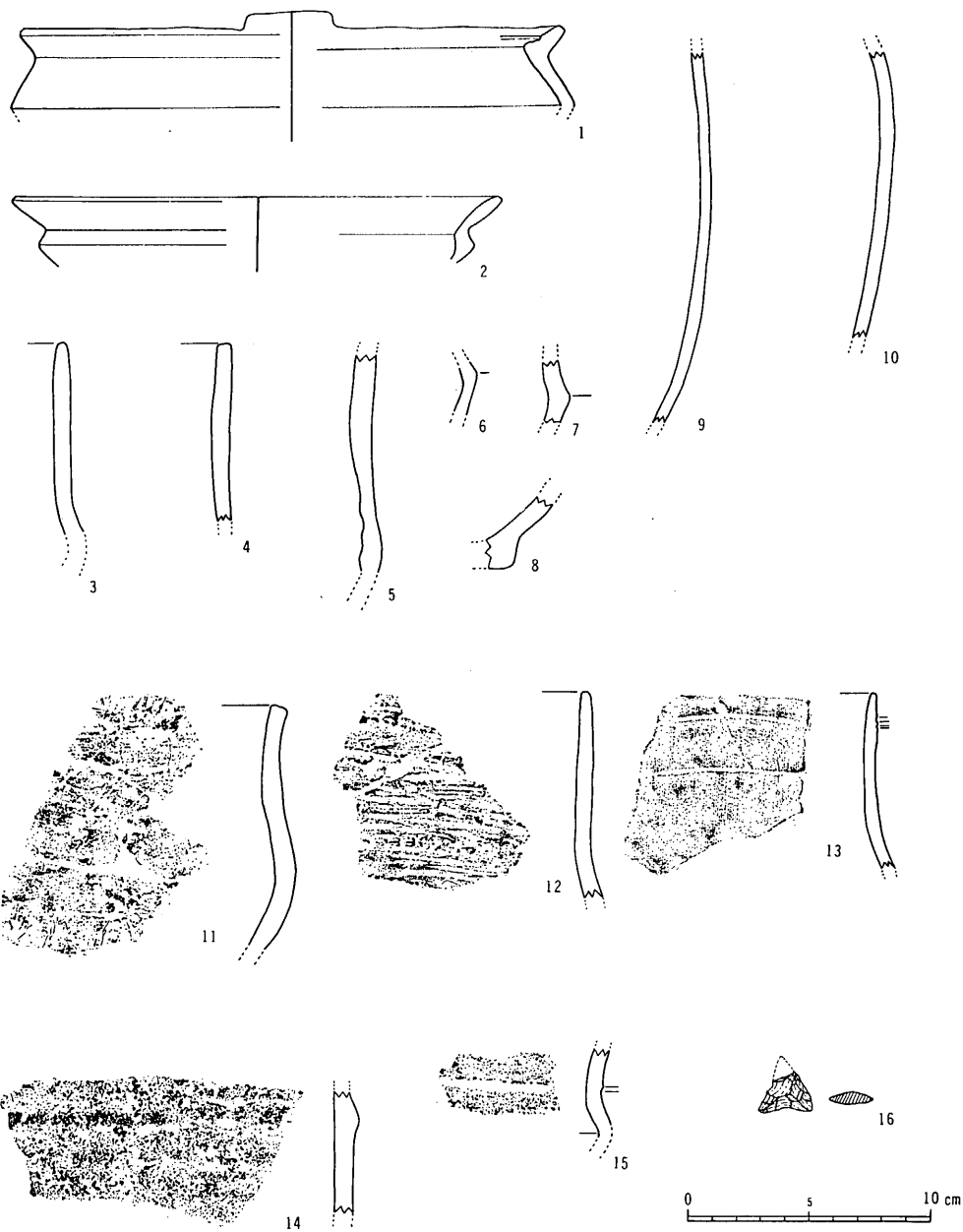
住居址より出土した土器は、粗製土器と精製磨研土器に分けることができる。

粗 製 土 器

(3, 4, 11, 12)。深鉢の口縁部で、胎土には砂を含み、焼成も余り良くない。(4, 11, 12)の内面には条痕が残っており、(12)の外面には明瞭な横えの条痕がある。(11)は口唇部に刻目が施されており、口縁部から斜めに、小さな沈線が施されている。これらの土器は、肩部から屈折すると考えられる。(5)は肩部で、内面に輪積と思われる痕跡を残している。(14)は胴部の破片で、器形は不明であるが、造り出しの丸味を持つ突帯を巡らしている。(8)は底部で、底部の全様はわからないが、平底になるであろう。



第 9 図 住 居 址



第 10 图 住居址出土遗物

精製磨研土器

(1, 2, 6, 7)。浅鉢の破片で、胎土はほとんど不純物を含まず、焼成も良く、よく磨かれている。(1)は直径約22cmで、底部は不明である。口縁部に台形の低い突起を持ち、口縁部はすどく折れ、肩部は「く」の字状に強く折れる。(2)は直径20cmで、底部を欠く、口縁部はすどく折れ、肩部から「く」の字状に折れる。(6, 7)は肩部の破片であるが、強く「く」の字状に折れる。(6)は器壁が薄く、(7)は厚い。(9, 10, 13)は深鉢で、(9, 10)は胴部の破片である。(9)は底部に近い破片である。(13)は口縁部の破片で、肩部は大きく「く」の字状に折れると思われる。口縁部には小さくて浅い沈線が二条施されている。(15)は壺の破片でやや、直立する口縁から、丸味を持った肩部の部分である。口縁部と肩部を分ける部分に一段ある。

石 鏝 (16)

灰白色の姫島産の黒耀石で作られており、挟りはわずかに入り、先端部を欠損している。これらの土器は、縄文晩期の「黒川式土器」に比定されるものである。(長野 卓司)

第 4 破 壊 墳

1. 破 壊 墳

住居址の南側に隣接して、一面に石材が散乱していた。石材はすでに掘りおこされて、不規則な状態であった。

付近の人の話によると、昔、古墳を破壊した跡ということで、調査期日の点から、今回の調査からは除外して、一応破壊墳として、取り扱った。(佐藤 保雄)

第 5 6 ト レ ン チ

1. 遺 跡

6 トレンチは、山陵先端より、水田面に向かって下降する、標高約51mに設定した。

丘陵の下降した所は、一部墓地によって丘陵を削られた部分があり、付近の人の話によると、墓地を作る際に多くの甕棺が出たということであった。また、農道によって、山陵の一部が削られている部分に、現在甕棺が露出している。

これらの点から考えて、墓地のすぐ上に、一部フラットな面があり甕棺の埋蔵が考えられたので、トレンチを設定した。

遺物は、地表面から、約10cmで出土しはじめたが、すぐ地山に達した。遺物のほとんどが、表土層より出土した。

地山は、地表に比べて急で、遺構らしきものは見あたらなかった。

遺物は、ばらばらの状態で出土し、表土層が薄いせいか、まとまった形で把握できなかった。

遺物として、筒形器台、小型甕形土器、高坏・壺などが出土し、そのほとんどが、丹塗磨研の土器である。付近に甕棺群（須玖式）があり、器台・甕・高坏・壺とセットをなし、そのほとんどが、丹塗磨研であるところから、最近類例が増えてきた。甕棺群中に存在する、祭祀遺跡と考えられる。

2. 出土遺物（第11図）

筒 形 土 器 （1）

高さ60cm、口縁部直径11.5cm、環状部直径22.5cm、底部直径38cmを計る大形の器台で、ほぼ完型である。

器面には丹が塗られている。現状では丹は全面ではなく、一部剝離している部分がある。特に口縁部、環状部は丹が濃く、脚部にいたって薄くなる。しかし、本来は、器台全面に鮮かな丹が塗布されていたと考えられる。内面には、口縁部の部分に一部塗られているだけで、他の部分には塗られていない。

器形は、口縁部がわずかに内彎し、環状部はT字形をなしている。脚部にかけてラッパ状にひろがり、脚部は「く」の字状になる。環状部のすぐ下から、筒状の部分にかけて、長さ38cmの細長い台形のすかしが切り込まれている。すかしは、胴部に等間隔で4ヶ所切り込まれており、長さ38cm、幅は広いところで3cm、狭いところで1.5cmで、焼成前にヘラなどのするどいもので切り取られている。

胎土は、大きな砂などの不純物をほとんど含まず、須玖式などの甕棺と同様な良質の胎土を使用している。

色調は、淡い黄褐色で、焼成は、甕棺などと同様に硬くしまっている。

また、脚部の破片が数片あり、別個体のものと思われ、少なくとも2個体が存在していたと考えられる。

高 坏 （2）

坏部の直径30mmで口縁は外に向って傾斜している。胴部に二条の台形の突帯をもっているが、上の突帯は、磨滅のためか、わずかに隆起をみせるにすぎない。坏部と脚部のつぎ目は、厚く、脚部は、ラッパ状に開き、筒形器台の脚と類似している。全面に、丹塗磨研が施されている。

壺 （3）

口縁部直径18cmあり、口縁部・胴部の一部と底部のみである。底部は平底で、全面に丹塗磨研が施されている。

甕 形 土 器 （4）

口縁部直径30cmで、口縁部、胴部の一部のみ残っている。

口縁は逆L字形をなし、口唇部には、刻目が施されている。口縁部直下には一条の複合三角の張り付け突帯をめぐらしている。

胎土は良好で、粘土以外ほとんど不純物を含まない。焼成良く、色調は茶褐色である。

甕 形 土 器 （5）

口縁部直径25cmで、口縁部、胴部の一部が残っている。

口縁部は逆L字形をなし、口縁部直下には一条の複合三角の張付突帯をめぐらしている。甕の全面には鮮やかな丹が塗布されている。

胎土は良好で、粘土以外ほとんど不純物を含まない。焼成も良く、胎土の色調は茶褐色である。

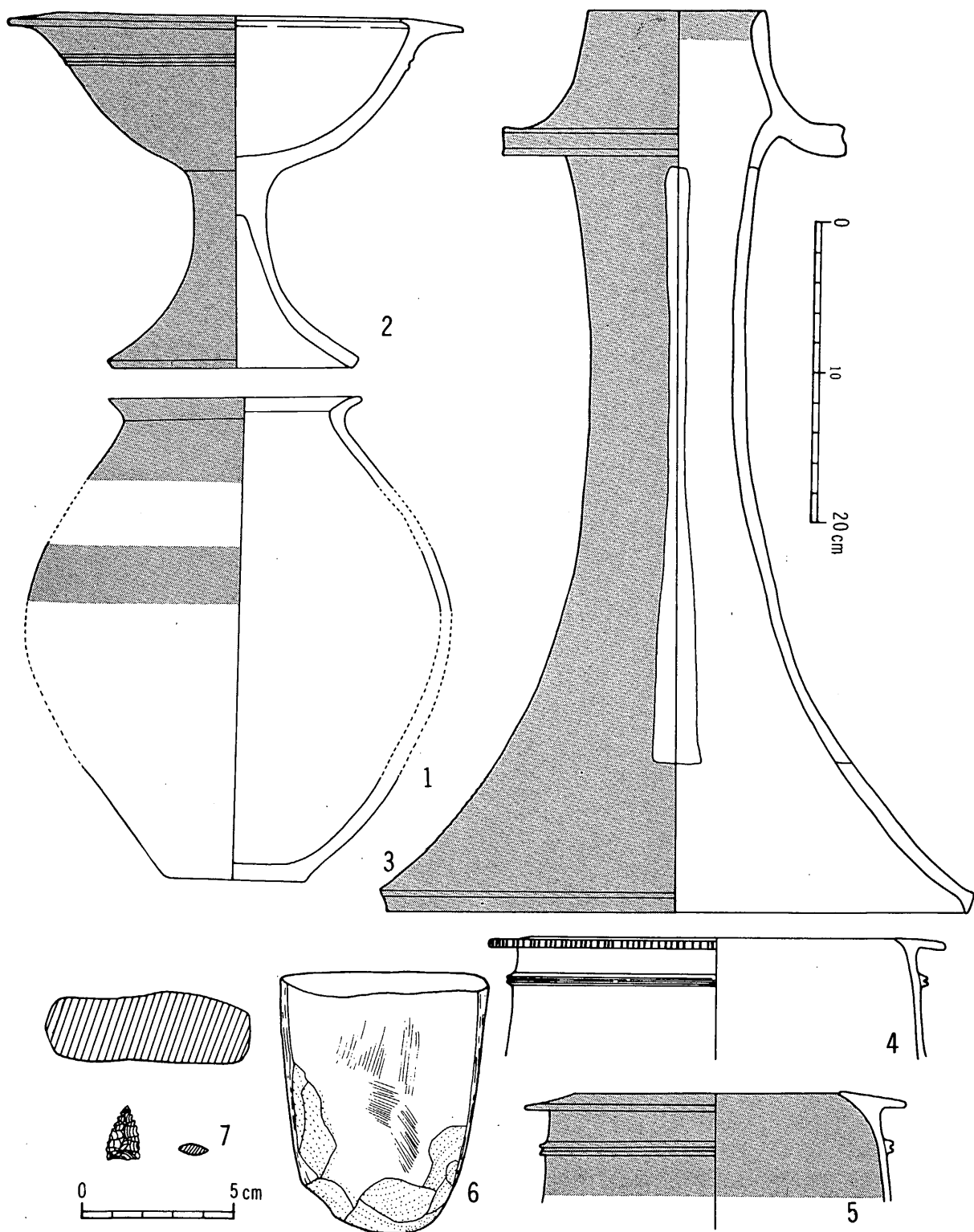
石 斧 （6）

やや黒みがかった灰色硬質の岩石製の石斧で身のづくりは薄く表面には、かすかに擦痕が残っている。頭の部分は欠損しており、現長8.5cm、幅7cm、厚さ2.5cmを計る。

石 鏃 （7）

基部に抉り込みを持たない。石鏃としては精巧なもので、黒耀石製である。

（赤崎 敏男）



第 11 図 6 トレンチ出土遺物

第 6 ま と め

1. 古 墳 群

A群3号墳は、山麓の先端部に築造された小円墳であり、同じ山麓には数十基におよぶ古墳群が形成されている。宮地獄山麓にはそのほか、天山、田代などの古墳群があり（註1）、隣接する夜須町砥上山山麓には、森原、吹田など数百基の古墳が築かれている（註2）。

これらの古墳群の持つ意味は、調査の例が少く不明確であるが、宝満川、山家川、そのほかの河川によって形成された肥沃な水田地帯をぬきにしては考えられないであろう。朝倉平野における群集墳の立地も、阿志岐周辺の古墳群の立地と同様に、平野を前面に望む山麓に多い。

これらの古墳群を形成するためには、相当数の集落が存在しなければならない。しかし、現在までにこの地方で発見された古墳時代の住居址は、夜須町三国手遺跡（註2）、筑紫野市針摺野黒坂遺跡、同市大曲遺跡、太宰府町池田遺跡（註3）をはじめとして、数ヶ所しか発見されていない。調査の極少さもあるが、まだ相当数の集落遺跡が丘陵や、平地、自然堤防上に営まれていたと思われ、その生活基盤は肥沃な水田地帯における農耕であったと考えられる。

宮地獄西側山麓に築かれた阿志岐古墳群は大きく、A群、B群、C群、D群に分けることができる。A群は尾根上にほとんど築かれているが、B、C、D群は、尾根をはずれた斜面にコブ状に築かれている。この状態が時間的な差を持つものか、推測の域を出ない。

このような、大規模の古墳群が形成された時期が短い期間であったのか、または、長い期間のあいだに築かれたか、今後の調査の課題であろう。

2. 墳 丘

A群3号墳の墳丘は、頂部がやや平坦な円墳であり、山側を1mほど尾部を切断している点が注目される。また、地山を整形し、盛土も最高1m前後ほどしかないので、低い墳丘といえよう。3号墳の東側には、4号墳があるが、この古墳も墳丘が低く、周囲を削って墳丘を作っている点などから見ても、3号墳とそれほど時期差がないものと思われる。

3. 内 部 主 体（石室）

主体部は、小型の横穴式石室であり、玄室部に直接横口を取り付け外部に短いラップ状に開く石積を持つ石室である。

この種の石室は、近年資料が増加している竪穴系横口式石室と呼称される石室であり、最近注目されてきた。

石室は、長さ2m、幅1mの小型の石室で、ほかの竪穴系横口式石室の例の数値と近似している（註4）。

竪穴系横口式石室の範疇に含まれる古墳は5世初頭に位置づけられる老司古墳(註5)を最古例とすることができよう。老司古墳は、竪穴式石室の形態を取っているが、石室の一部に横口部を設け、追葬を前提とした構造である。また、狭長な竪穴式石室に横口を取り付けた稲童21号墳(註6)は、5世紀中葉から、5世紀後半に成立したと考えられている。

A群3号墳の石室は、これらの石室から発展した段階の形式であると考えられ、七双子2号墳(註7)、サコガシラ古墳群(註8)、片山古墳群(註9)などの石室と類似する。阿志岐古墳群の周辺からは、朝倉町妙見古墳群(註10)、筑紫野市武蔵原口2号墳、同鷺田山1号墳(註11)などが、竪穴系横口式石室としてあげることができる。

竪穴系横口式石室の年代として、石山勲氏は、片山古墳群の報告書の中で、「5世紀後半から6世紀初頭に集中する」点をあげられ、山中英彦氏は、稲童古墳群の報告書の中で、「竪穴系横口式石室の発展或いは、流行が現段階では、6世紀前半代に断絶する」と述べられている。また、この種の古墳が群集する点をも注目されている。このことは、今まで、群集墳といえ、後期後半と考えられていた概念を再考しなければならない問題を提起された。このため、A群3号墳の周囲の古墳も竪穴系横口式石室となる可能性が強い。

4. 遺物

遺物の概略については、前に述べたが、遺物の持つ性格について考えてみたい。

遺物としては、鉄剣、鉄鏃、ガラス小玉が出土したが、時期を決定できるような遺物は出土していない。しかし、鉄鏃は、後期の様相を持っているが、鉄剣がやや古い特徴を持つ。また、ガラス玉が多いことも注目される。遺物の面からの時期の決定は困難である。

5. 築造年代

阿志岐古墳群(A群)3号墳の築造年代は、遺物の点から見ことはあまりできない。石室の構造面より見ると竪穴系横口式石室の発展した形であり、出現から消滅までの期間を考え、消滅時期を6世紀前半代とすれば、この古墳は、6世紀迄に位置づけられるのではないだろうか。

(高山 明, 赤崎敏男)

- 註1 筑紫野町分布地図(筑紫野町教育委員会)昭和46年
- 2 朝倉高等学校編「埋もれていた朝倉文化」昭和44年
- 3 「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告」(池田遺跡, 大曲遺跡, 野黒坂遺跡)福岡県教育委員会昭和45年
- 4 石山勲外「片山古墳群」(福岡県文化財調査報告書第40集)昭和45年
- 5 小田富士雄外「老司古墳調査概報」昭和44年
- 6 大川清外「福岡県行橋市稲童古墳群第2次調査抄報」(蔵内古文化研究所)昭和40年
- 7 賀川光夫外「七双子古墳群」(大分県教育委員会)昭和37年
- 8 松岡史「サコガシラ古墳群」唐津市史 昭和37年
- 9 註4前掲書
- 10 註2前掲書
- 11 昭和46年度県道5号線の調査の際発見された。

6. 住 居 址

阿志岐シメノグチ遺跡における縄文晩期の住居址の発見は、重要な意味を持っている。

住居址は、斜面に作られており、方形プランを有する。壁の高さが東側壁で1.5mを計ったことから、住居址ではないとも考えられたが、しかし、底面より土器の出土があり、炭化物、焼土、周囲の石の焼けかたから、住居址と考えるにいたった。

従来、縄文期の遺構は発見される場合が少く、住居址は希薄に近い。現在までに筆者の知見にある晩期の住居址は、熊本市健軍町上ノ原遺跡の円形プランの住居址（註1）、長崎県島原市磯石原遺跡の平地住居址（註2）、同来南高来郡小浜町小浜遺跡の平地住居址（註2）などで、福岡県においては皆無である。このように類例が少い住居址についての考察はさしひかえ、今後の資料の増加を待つ以外にはないであろう。

7. 遺 物

出土遺物は、粗製土器と精製磨研土器とに大別できる。土器の器種は、浅鉢形、深鉢形、壺形がある。破片の出土は多かったが、器形を知ることができるものは少なかった。

黒川式土器は、鹿児島県日置郡吹上町永吉砂走の黒川洞穴出土の土器を標式としたもので、九州全土に分布し、地域によって若干の地域差があるといわれている（註3）しかし、北部九州における黒川式土器の発見は極めて断片的であり、地域差を明確にすることはできない。

シメノグチ遺跡周辺における黒川式土器の出土は、野黒坂遺跡（註4）、常松遺跡（註5）をあげることができるが、量としても少なく、確実な遺構は発見されていない。

住居址から発見された石器は、石鏃一個のみで、石器と土器の関係を考えることはできないが、石鏃の石質が、灰白色の姫島産の黒耀石であることは注目される。

土器の中には、いままで見られなかった土器がある。深鉢形土器の口縁から肩部にかけて斜めに沈線を持ったものや、胴部に突帯を持つものがあり、黒川式の土器に1例を加える。

このように、資料が少ない黒川式の中では住居址一括資料であり、今後の資料の増加に期待する。

以上のことから、晩期の住居址がなぜ阿志岐の山麓の先端に作られたか、背後は山間であり、前面は宝満川によって形成された沖積平野である。このような自然環境が居住させる要因であったか、それは現在のところ不明である。しかし、この周辺で今後、同様な遺跡が発見される可能性は極めて強いといえるであろう。

（高山 明，赤崎敏男）

註1 富田紘一外「熊本市健軍町上ノ原遺跡調査報告書」（熊本市教育委員会）昭和46年

2 島原半島の考古学的調査第2次概報（昭和36年度）九州考古学14、昭和37年

3 乙益重隆「九州西北部」日本の考古学Ⅱ 昭和40年

4 「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告」（野黒坂遺跡）福岡県教育委員会 昭和45年

5 賀川光夫外「常松遺跡調査報告書」（別府大学考古学研究報告書1）昭和45年

第 7 付 論

甕棺葬における祭祀について

— 筒形器台を中心として —

I

弥生時代の墓制の中で、九州地方において最も多く見られるものに甕棺葬があげられる。甕棺は、群集して発見されることが多く、近年多くの甕棺群についての調査がなされ、甕棺の群集状態があらわにされつつある。

その中で、群集する甕棺墓地の一区画に、埋葬とは異なった土器群が存在するのが注目されはじめた。土器群は、そのほとんどが丹塗磨研土器を主体としたもので、中には故意に破壊したと考えられるものも出土している。

これらについては、鏡山猛氏、柳田康雄氏の論攷があげられる。鏡山猛氏は、朝倉郡三輪町栗田遺跡、三潞郡荒木町白口遺跡の発掘成果より、墓地の一区画に供献された土器群を共同体祭祀の存在であるとされ、また、個々の甕棺に伴う副葬品以外の供献土器を、個人に対しての祭祀であると考えられている（註1）。柳田康雄氏は、その論攷の中で、丹塗磨研土器と甕棺についておよび、丹塗磨研土器と筒形器台についての関係に注目されている（註2）。

筑紫野市阿志岐シメノグチ遺跡における、筒形器台、丹塗磨研土器の出土は、甕棺葬における祭祀の1例を加え、また、数少い発掘資料でもある。そこで、筒形器台を中心として、甕棺葬における祭祀を考えてみたい。

II

現在までに、筒形器台が出土した遺跡は、15ヶ所をあげることができる。

福 岡 県

- 福岡県糸島郡芥屋町新町付近（註3）
- 福岡県糸島郡前原町志登志登遺跡（註4）
- 福岡市住吉平田（註5）
- 福岡市比恵字古賀（註6）
- 福岡県筑紫郡春日町小倉竹ヶ本（註7）
- 福岡県筑紫郡筑紫野町阿志岐シメノグチ
- 福岡県朝倉郡三輪町大字栗田（註8）
- 福岡県朝倉郡三輪町高田字平松（註9）
- 福岡県甘木市馬田町字上原（註10）
- 福岡県甘木市福田町大字平塚栗山（註11）

佐 賀 県

- 佐賀県東松浦郡鏡村柏崎貝塚（註12）
- 佐賀県三養基郡基里村曾根崎（註13）
- 佐賀県三養基郡南茂安村本分（註14）
- 佐賀県神埼郡城田村託田貝塚（註15）
- 佐賀県神埼郡城田村西姉貝塚（註16）

Ⅲ

◦ 志 登 遺 跡

糸島平野の中心部に位置し、支石墓群として著名な遺跡である。昭和28年に鏡山猛氏らによって調査が行なわれ、大陸における古代墓制との関係が明らかにされている。

支石墓群として調査されたほかに、周辺に試掘溝を設定した。試掘溝より、弥生式土器、土師器、須恵器、青磁など多くの遺物が出土している。その出土遺物の中に筒形器台の脚部破片がある。底径37.4cmで、上半分は欠損しており、長方形のすかしをもっている。すかしは、4～5個あいていたものと思われる。そのほかに、多くの弥生中期の壺、甕、高坏などが出土しており、その中には若干丹塗磨研土器が含まれている。

◦ 栗 山 遺 跡

筑後川の支流である佐田川と小石原川との間にある洪積台地上に立地し、古くより甕棺、石棺、住居址などが多く発見されている。

大正年間より、数次の調査の結果、甕棺内より、貝釧、銅剣が発見された。

昭和39年の第3次調査が行なわれた際、甕棺群の一面で丹塗磨研土器群が出土している。土器群は、表土下約50cmの深さを持つ土壌の中に、幾重にも重なった状態で出土した。

遺物の器形は、筒形器台、壺、甕、鉢、丹塗をしていない台付碗などが出土している。

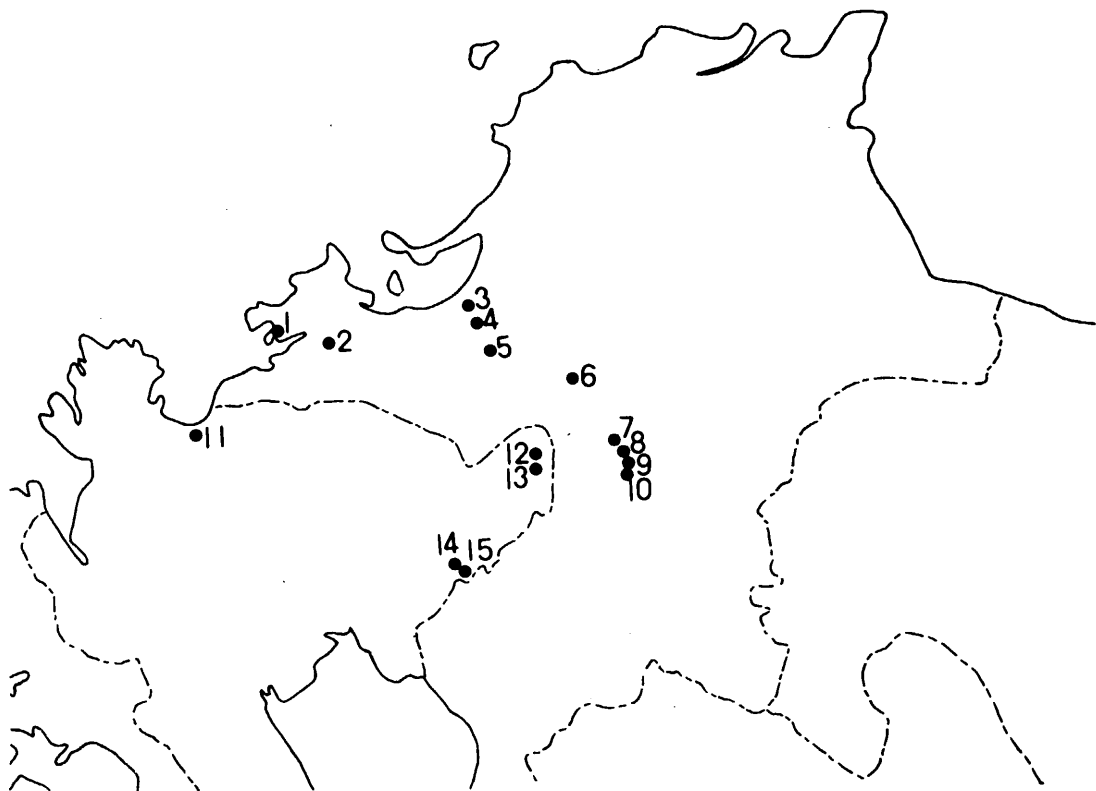
筒形器台は、高さ1m、口縁部は直立し、下部は鐐状の環縁となり、環縁の下はゆるやかにカーブして、脚部へ移る。器面の上部は、櫛目文が縦に平行に走り、縁部は、中心に沈線1条を施し、タタキ文を施している。薄手の精製品で、濃く丹を塗っている。

◦ 栗 田 遺 跡

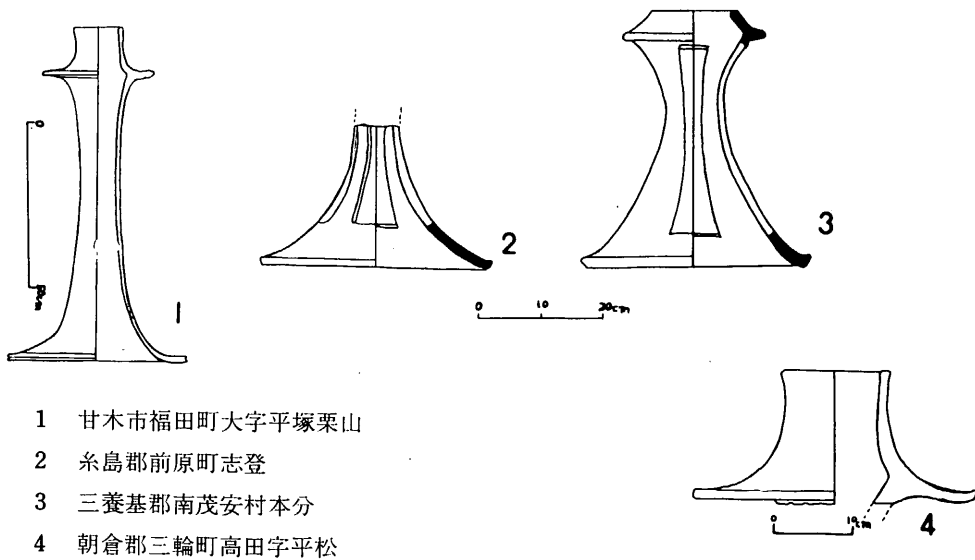
昭和27年、元栗田小学校の地下げ工事の際に多量の甕棺が発見され、朝倉高等学校古賀精里氏によって調査されたものである。調査の結果18個の甕棺が発掘された。

遺跡は、水田からの比高1～2mの微高地上にあり、東西40m、南北20mの地域に群集している。すでに一部は削られており、元来は、30個近くあったと考えられている。その甕棺群の1画に、丹塗土器群を出した区域が目される。

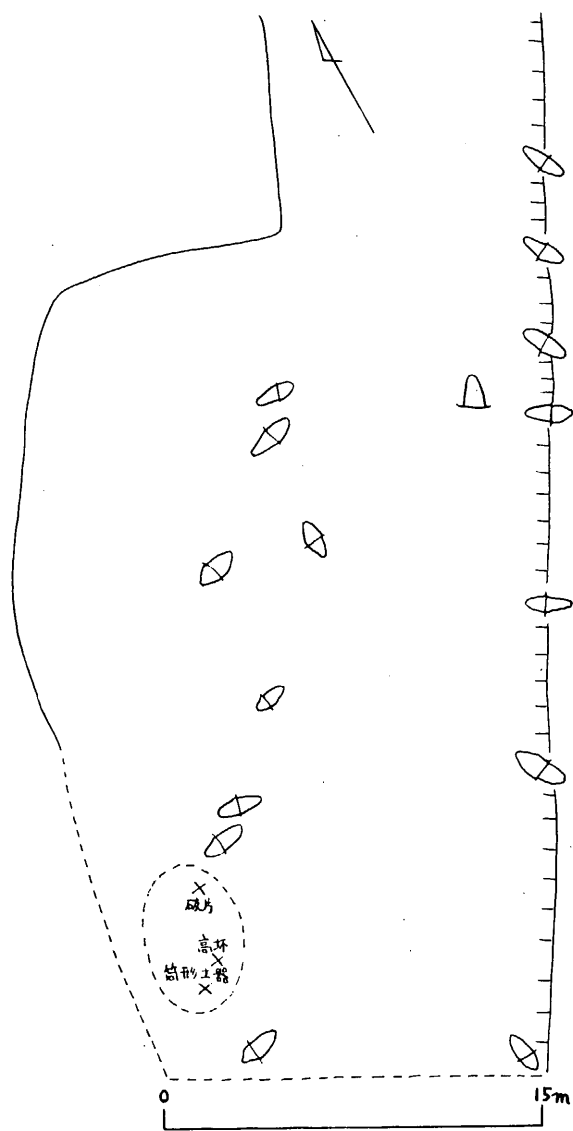
出土遺物は、高坏、埴、筒形器台などである。筒形器台は2個体分あり、1つは脚部に一部欠損があるだけで、ほとんど完型である。高さ80.5cmで、上端は円筒で低い内反する口縁があり、下部は、鐐状の環縁となっている。環縁の下は裾開きの脚となる。内部は中空で、下部に向かって広がる。もう1つは破片で発見された。筒形器台の口縁の1部で、脚部には、約5ヶ所のすかし



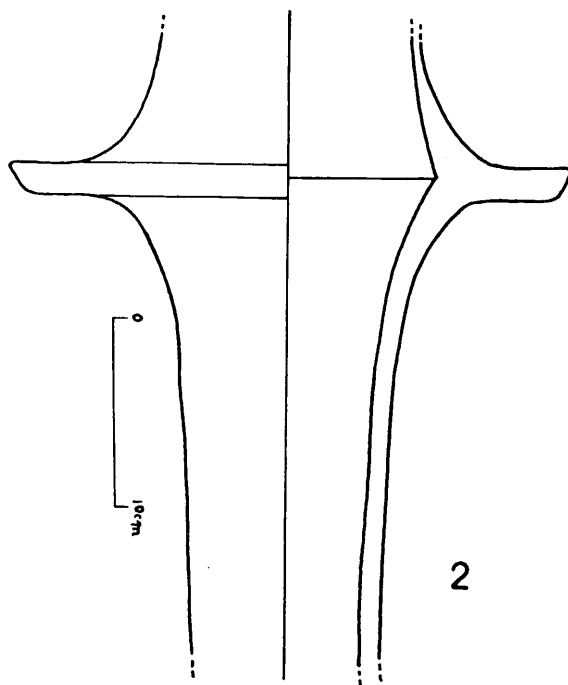
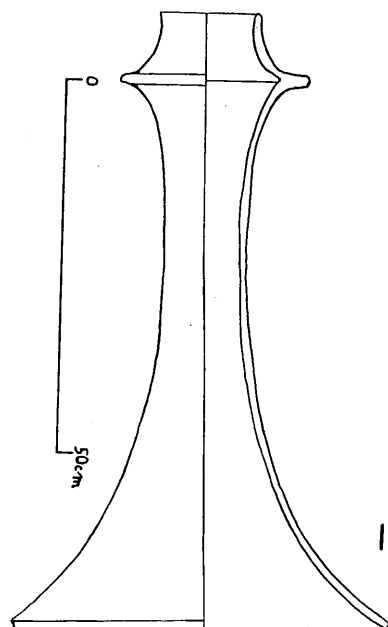
筒形器台出土分布図



第 12 図 筒形器台出土分布図，筒形器台



栗田遺跡甕棺配置図



1 朝倉郡三輪町栗田

2 筑紫郡春日町小倉竹ヶ本

第 13 図 筒形器台出土状態, 筒形器台

を持っており、口縁部は丹が鮮やかであるが、裏側は刷毛で粗く描かれ、全面に塗っていない。

・佐賀県三養基郡基里村曾根崎

大木川に面した台地縁部で、石剣などと共に筒形器台が出土している。出土状態は不明であるが、付近に合口甕棺が多く出土している。

筒形器台は胴部破片で、円筒状である。現在、遺物は不明で細部についてはわからない。

・柏崎貝塚

筒形器台は、貝塚の南方約1間のところより発見された。

筒形器台は口縁部より胴部にかけての破片で、長さ2尺位、周り1尺位で、筒形をしており、すかしはない。

・詫田貝塚

長崎本線神埼駅より、南へ馬場川に沿って下ると、約4kmの所に詫田西分村がある。部落、および、部落の北方約1,300アールにわたって詫田貝塚が形成されている。本貝塚は筑後川沿岸で数少ない弥生期の貝塚であり、土器、石器などが豊富に出土している。その出土遺物の中に筒形器台が見うけられる。

器台は、口縁部より鐏状部、胴部の1部が残っている。しかし、残念ながら戦前の出土遺物であり、遺物の所在が明らかではないので、細部にわたって不明である。

IV

前項で、主な筒形器台の出土地、および、出土状態をあげた。これらのことより、少し考察を加えてみたい。

まず分布を見ると、筒形器台の出土地は、福岡県10ヶ所、佐賀県5ヶ所で、北部九州に集中して発見されている。ほかの地域からはまだ報告例がない。北部九州の中でも、特に糸島平野、福岡平野、朝倉平野の周辺という有数の甕棺群集地帯に、ほとんどが限られて発見されている。

筒形器台の出土状態は、発掘例が少なく、栗田遺跡、栗山遺跡、シメノグチ遺跡などがあげられる。ほかの遺跡は出土状態が不明なものが多い。

栗山遺跡では、筒形器台、高坏、甕、壺などが地表下約50cmの深さを持つ土壌に、あたかも供献されたようにかたまった状態で出土している。シメノグチ遺跡では、筒形器台2個分、高坏、甕、甕がセットとして一ヶ所にかたまって出土しているが、しかし、表土層が薄く遺構は発見されなかった。栗山遺跡と同様に、供献されたような状態であったと推定される。栗田遺跡では、10数基の須玖式甕棺とともに2個体分の筒形器台が出土しており、同地点より、高坏、壺、甕などが出土している。筒形器台は出土していないが、宝台遺跡、白口遺跡においても、同様な例を見ることができる。宝台遺跡は、昭和44年度に福岡市教育委員会により調査された遺跡で、弥生中期の住居址、および、同時期の甕棺墓地とが発見されている。甕棺墓群の中に、3ヶ所に分散して、埋葬とは異った土器群が存在した。遺物は浅い土壌内に置かれていて、土壌からは、高坏、

壺、甕が出土している（註17）。白口遺跡においては、2ヶ所において丹塗磨研の高坏、埴が出土している（註18）。

これらの事から、筒形器台は本来単独で出土するものではなく、普通は、高坏、甕、壺などの丹塗土器群とセットをなして出土するものであり、そして、筒形器台自体も、複数で存在するものと考えられる。

筒形器台が出土しない遺跡でも、高坏だけは単独に出土する場合が多く、供献土器としての高坏の用途を考えなければならない。

筒形器台の出土地を考えてみると、そのほとんどが甕棺墓地と関係がある遺跡で発見されている。栗田遺跡、栗山遺跡、シメノグチ遺跡などでは、甕棺との関係など、出土状態が判明している。出土状態が不明な遺跡でも、前項にあげた15ヶ所のほとんどの遺跡で、甕棺が同一地点より出土していたり、甕棺が近くで出土している場合が多い。

このことから、筒形器台は本来甕棺墓に伴う土器であり、甕棺墓以外の遺跡からは発見されることはないと思われる。しかし、春日町竹ヶ本遺跡で発見された筒形器台は、中期の住居址内より出土しており、今後、再検討しなければならない。

筒形器台は形態によって、大きく2種類に分けることができる。

第1類 栗田、栗山遺跡を代表とするもので、口縁部は直立、または、やや内彎し、鐏状の環縁を持ち、ゆるやかにカーブする円筒上の脚を持っている。

第2類 シメノグチ、志登、本分遺跡を代表とするもので、口縁部は直立、または、やや内彎し、鐏状の環境を持ち、ゆるやかにカーブする円筒上の脚で、脚に4～5個の切り込まれたすかしを持っている。

この2種類の筒形器台は、すかしを持つものともたないものと大別できるが、ほかの、口縁部、鐏状部、脚部のカーブなどには大きな形態の差は求め難く、栗田遺跡の例では、1類、2類の筒形器台が同時に出土していることから、同一時期に、二種類の筒形器台が同時に存在していたと考えられる。

次に筒形器台の時期を考えてみると、器台の口縁部については、ほかの遺物に類形を見ることはできないが、鐏状部については「T」字形をなし、中期の特徴をみせている。また、脚部については、カーブや、脚の立ちぐあい、脚下部の「く」の字にくびれる部分などは、中期、特に須玖式の高坏の脚と同一形態を取っている。しかし、脚部にすかしを切るという手法は、ほかに、類例をみないものである。

筒形器台とセットとして出土する遺物を見てみると、高坏、甕、壺などが出土しており、その時期は、ほとんどの遺物が中期中葉の須玖式に属するものであって、ほかの時期の遺物は、まったく発見されていない。

筒形器台を出土する甕棺群においても、そのほとんどの甕棺個体の時期は、須玖式であり、中期の甕棺墓群に限って、筒形器台は出土している。

以上のことから、筒形器台は中期中葉の須玖式のみが存在することとなり。須玖式の代表的な

遺物といえる。

須玖式の前後には、この種の器台を見ることができないが、後期になって、九州、中国地方において、特殊な大形器台が出現してくる。筒形器台と、大形特殊器台とは形態が異なったものであり、関係があるかどうかは現在のところ、不明である。

このように、50cm～1 m程の大型の筒形器台を作る技術は、相当高度なものであっただろうが、当時、2 m余の合口甕棺を作る技術を持てれば、さほど困難なことではなかったであろう。

筒形器台や、それとセットとして出土する土器は、そのほとんどが丹塗磨研の土器であり、甕棺や、甕棺内部に赤色顔料を塗ったり、人骨に塗ったのを見ると、弥生人の赤色に対する呪術的な観念を知ることができる。

以上のべたことから、筒形器台は、甕棺葬に用いられる祭器であり、ほかの丹塗磨研土器とともに甕棺群の一区画に出土するという特殊な状態であるので、甕棺墓群に対しての明らかな、供献という形をとっている。

そのことは、甕棺墓群を形成する共同体が、甕棺群に対して、崇拜的な葬送儀礼行為を行なったものと考えることができる。

これとは別に、甕棺墓では、往々にして甕棺に隣接して、丹塗磨研土器が発見される場合がある。そのおもな遺跡を上げてみると、

白口遺跡では、2個の中期甕棺に隣接して遺物が発見されている。第14号小児甕棺には、同じ深さに伏せておかれた浅鉢形土器があり、第15号小児甕棺には、高坏、ピーカ形鉢が出土している。

福岡県粕屋郡席内村鹿部皇石神社より、大型甕棺が発見され、丹塗磨研の高坏が、同場所より出土している（註19）。福岡県三潞郡三潞村早津崎から、合口大型甕棺が発見され、高坏2個、埴が隣接して出土した（註20）。福岡県筑紫郡二日市武蔵原口、原口古墳墳丘下より、4個の須玖式甕棺が発見され、第1号甕棺の上に約1.2 mの所より、1個の野石と、丹塗磨研の埴が出土している（註21）。

以上のことは、甕棺個体に対しての丹塗磨研土器の出土例を上げた。資料が少ないという点はあるが、筒形器台を含む、丹塗磨研土器群と同じく、中期の須玖式がほとんどを占めている。また、出土遺物が、埴、高坏という点から考えても、類似している。

このことは、高坏、埴類が、死者に対して食物類をささげたものと考えられ、それは被葬者に対しての呪術的なあらわれであり、供献という形をとることは、筒形器台、丹塗磨研土器群の共同体における祭祀と、甕棺の被葬者に対しての、個人祭祀の2通りに分けることができる。

V

以上、甕棺葬における、祭祀のあり方について述べてきたが、これらが何を意味するのであるうか。

遺物の点から見てみると、そのほとんどが、中期、須玖式に属するものである。須玖式の段階は、北部九州において弥生文化の頂点であるといわれ、須玖式以降、甕棺などが激減する。そし

て、次第に弥生文化の中心は、東の畿内地方へと移っていく。

須玖式期における、筒形器台、丹塗磨研土器群を供献するという祭祀形態は、須玖式文化独自のものです、このことは、奴国を中心とする須玖式文化圏を形成しているのではないだろうか。

最後になりましたが、本稿を草するに当り、国学院大学教授乙益重隆先生を始め、各氏の御援助を受けましたことを、本紙上にてお礼を申し上げます。(赤崎 敏男)

註1 鏡山猛「甕棺累考(1)」史淵第53号 昭和27年

2 柳田康雄「甘木市朝倉郡を中心とした甕棺の一考察」埋もれていた朝倉文化所用(朝倉高等学校編) 昭和44年

3 鏡山猛「甕棺累考(1)」史淵第53号所用 昭和27年

4 文化財保護委員会「志登支石墓群」(埋蔵文化財発掘調査報告書第4) 昭和31年

5 中山平次郎「北九州に於ける先史原史両時代中間期間の遺物に就いて」考古学雑誌 第7巻 第16号

6 註3前掲書(九大文学部考古学資料室蔵)

7 渡辺正気「竹ヶ本遺跡調査報告」福岡県文化財調査報告書 昭和36年

8 朝倉高等学校史学部編「埋もれていた朝倉文化」昭和44年

9 註8前掲書

10 註8前掲書

11 註8前掲書

12 吉村茂三郎「久里貝塚」佐賀県史蹟名勝天然記念物報告書2

13 松尾楨作「東肥前の先史遺跡」昭和10年

14 註4前掲書所用

15 註13前掲書

16 註1前掲書所用

17 「宝台遺跡」日本住宅公団 昭和45年

18 註1前掲書所用

19 註1前掲書所用

20 註1前掲書所用

21 島田寅次郎「異例の古墳」福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書10 昭和10年

。付、筒形器台の名称については、いままで、大型器台、大型特殊器台など、まちまちの名称が用いられたが、この名称は、弥生時代後期以降に現われる大型器台類と混同されやすく、混乱を招くと考え、乙益重隆教授の御助言を受け、あえて今回は、筒形器台という名称に統一した。

脱稿後、松岡史氏の御教示により、福岡県小郡町小郡遺跡から筒形器台環状部破片、前原町志登部落内より破片、佐賀県三田川町大字田手より破片が出土したとの御指導を得た。

圖

版

図 版 目 次

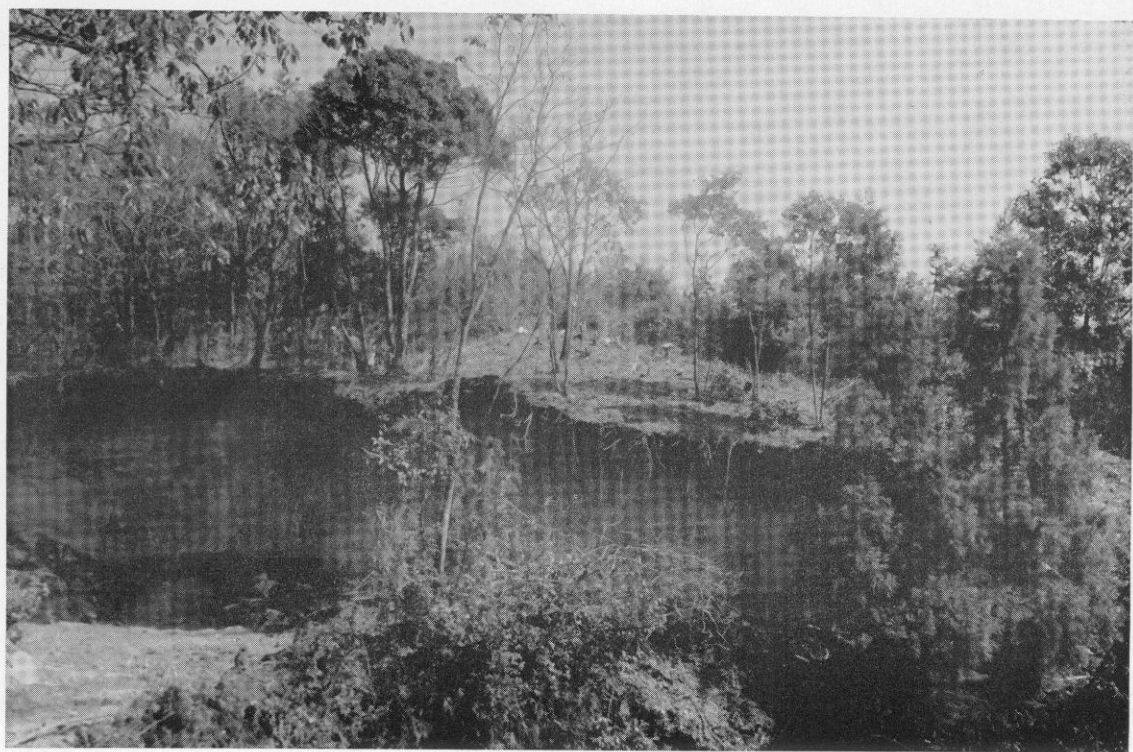
図 版 1	(1) 阿志岐航空写真
	(2) 遺 跡 遠 影
図 版 2	(1) A 群 3 号墳近影
	(2) 遺跡より平野部を望む
図 版 3	(1) 墳丘発掘状態
	(2) A 群 4 号 墳
図 版 4	(1) 石 室 全 影
	(2) 石室内敷石、遺物出土状態
図 版 5	(1) 横口部閉塞状態
	(2) 横口部（内部より）
図 版 6	(1) 前 庭 部 墓 道
	(2) 墓道部土層断面
図 版 7	(1) 1 トレンチ墳丘断面
	(2) 2 トレンチ墳丘断面
図 版 8	(1) 3 トレンチより石室を望む
	(2) 破壊墳石材散布状態
図 版 9	(1) 石室内出土ガラス小玉
	(2) 石室内出土鉄剣
	(3) 石室内出土鉄鏃
図 版 10	(1) 墳丘内遺物出土状態
	(2) 墳丘出土土器
	(3) 墳丘出土土器
図 版 11	(1) 住 居 址
	(2) 住居址内の状態
図 版 12	(1) 住居址石材露出状態
	(2) 住居址内深鉢形土器出土状態
図 版 13	(1) 住居址内出土遺物（粗製土器）
	(2) 住居址内出土遺物（精製磨研土器）
図 版 14	(1) 住居址内浅鉢形土器出土状態
	(2) 6 トレンチ遺跡近影
図 版 15	(1) 6 トレンチ出土丹塗筒形器台
	(2) 6 トレンチ出土丹塗壺形土器
	(3) 6 トレンチ出土丹塗高坏
図 版 16	(1) 6 トレンチ、筒形器台、高坏出土状態
	(2) 6 トレンチ出土遺物



1. 阿志岐航空写真〔矢印, 遺跡〕



2. 遺跡遠影（西より）



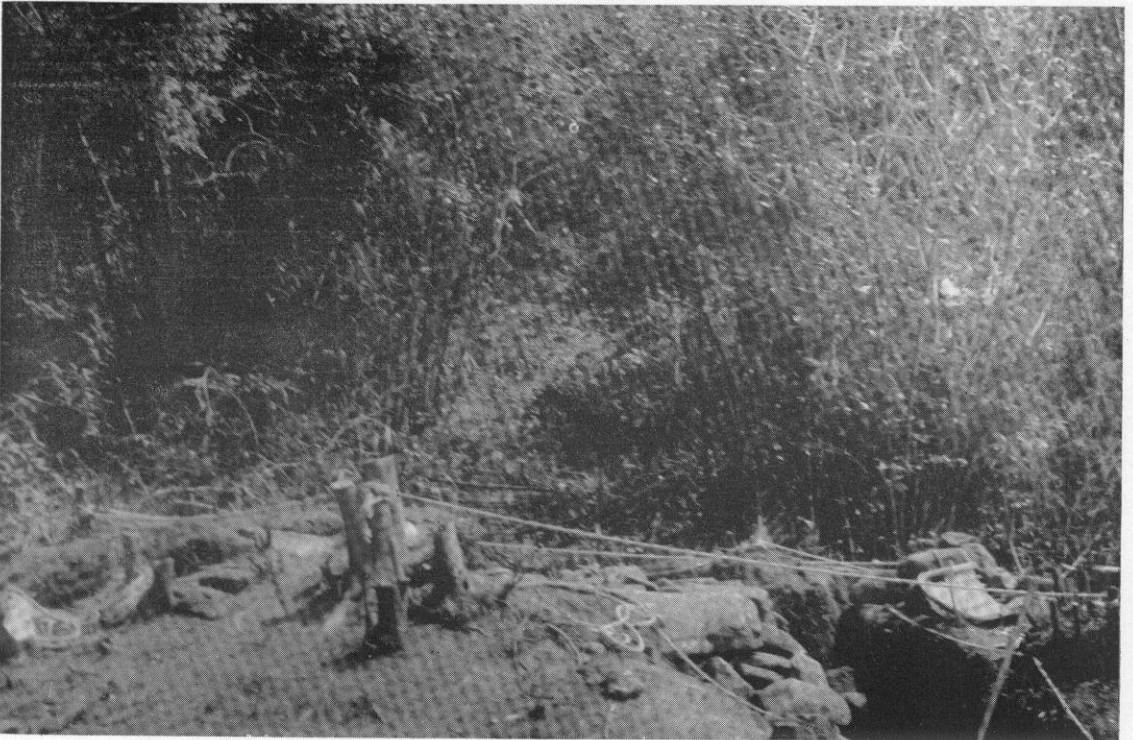
1. A 群 3 号 墳 近 影 (北より)



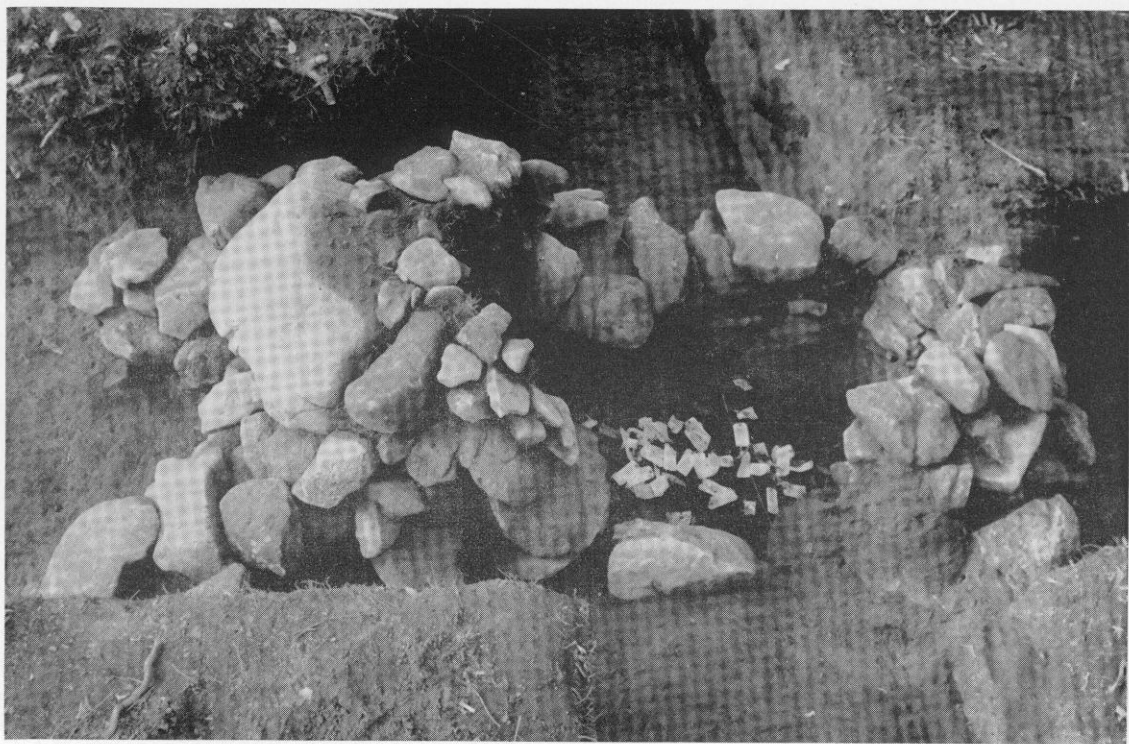
2. 遺跡より平野部を望む (東より)



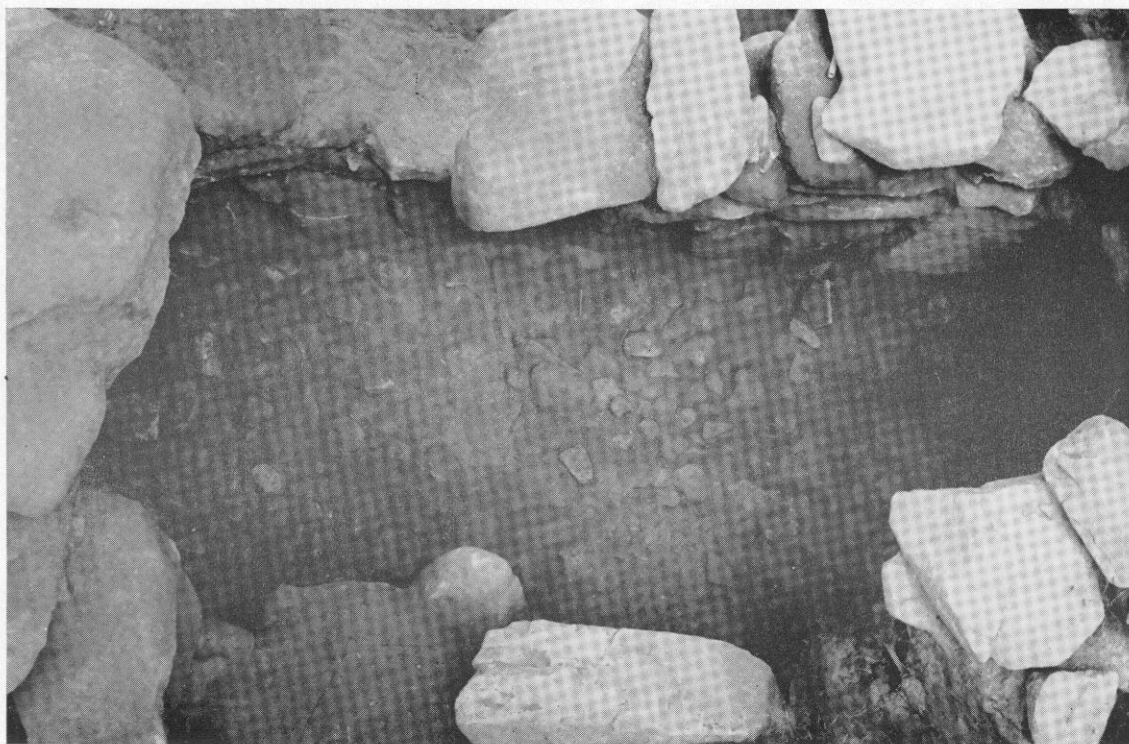
1. 墳丘発掘状態（東より）



2. A 群 4 号 墳（西より）〔矢印 4 号墳〕



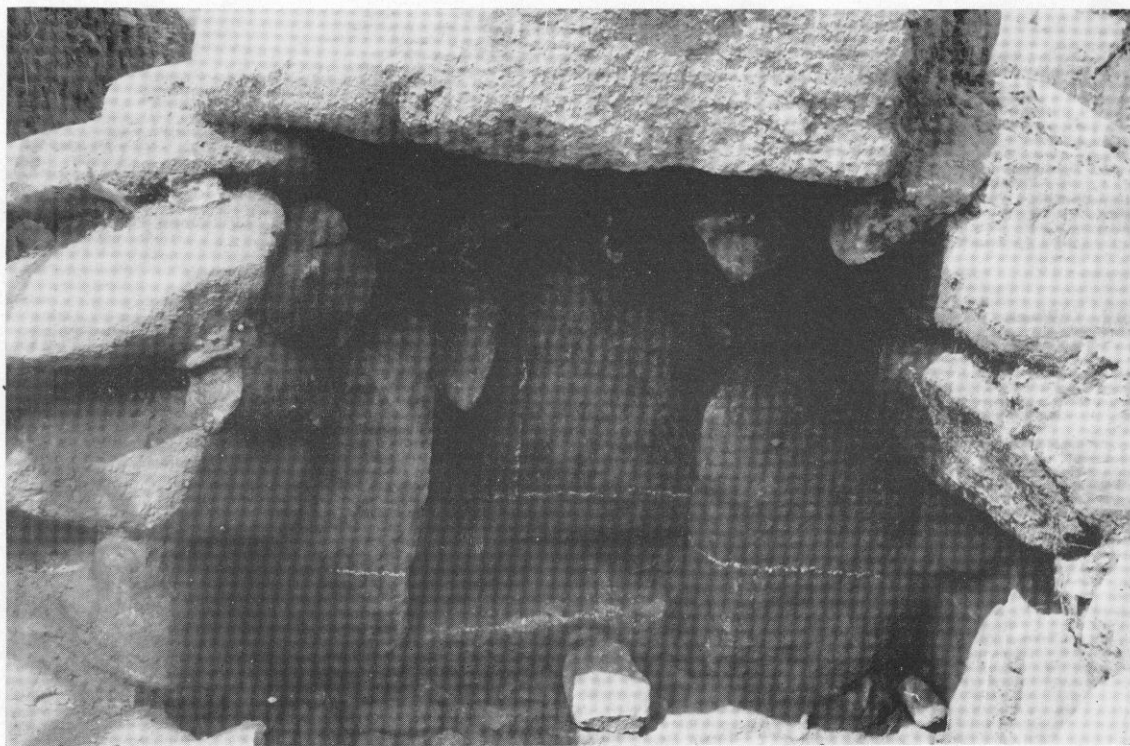
1. 石室全影（南より）



2. 石室内敷石，遺物出土状態（南より）〔矢印遺物〕



1. 横 口 部 閉 塞 状 態 (西より)



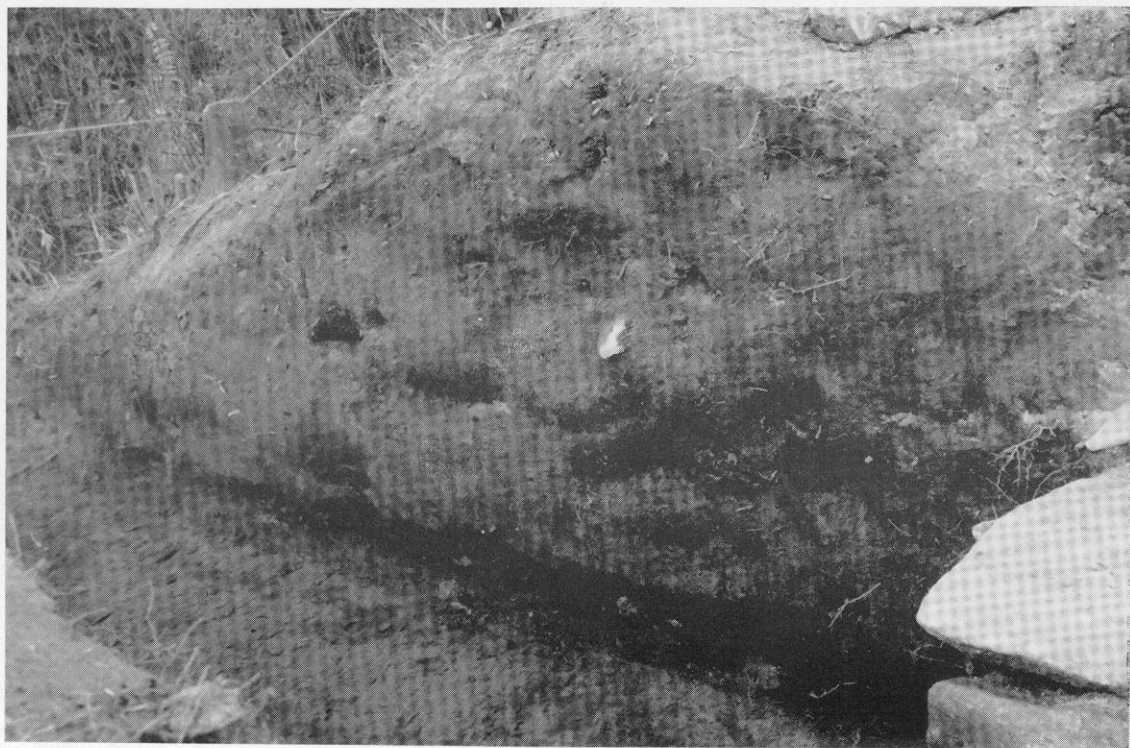
2. 横 口 部 (内部より)



1. 前庭部墓道（西より）



2. 墓道部土層断面（西より）



1. 1 トレンチ 墳丘断面 (西より)



2. 2 トレンチ 墳丘断面 (西より)

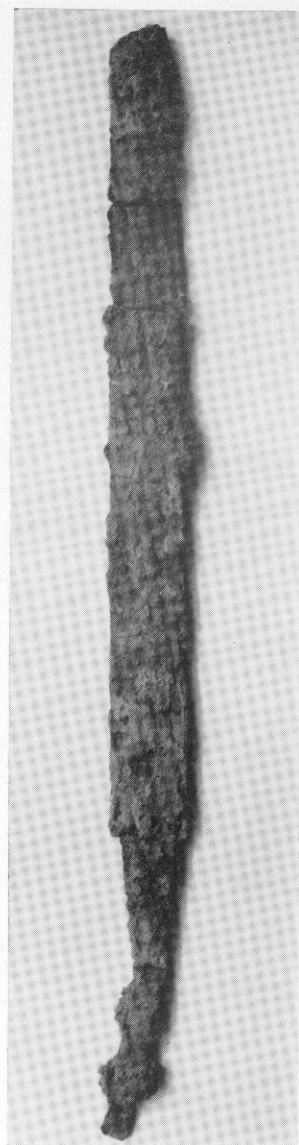
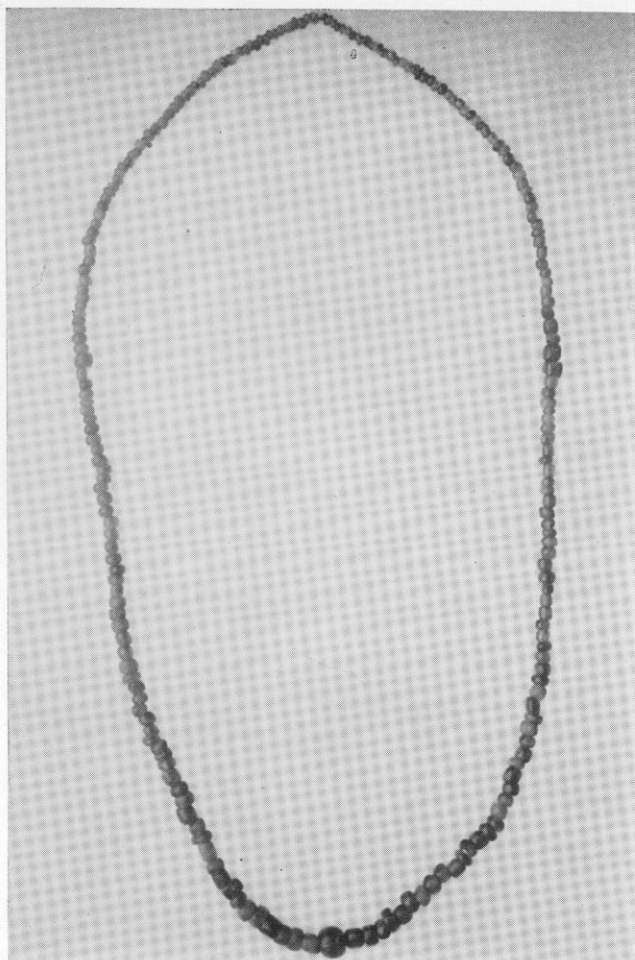


1. 3トレンチより石室を望む (南より)

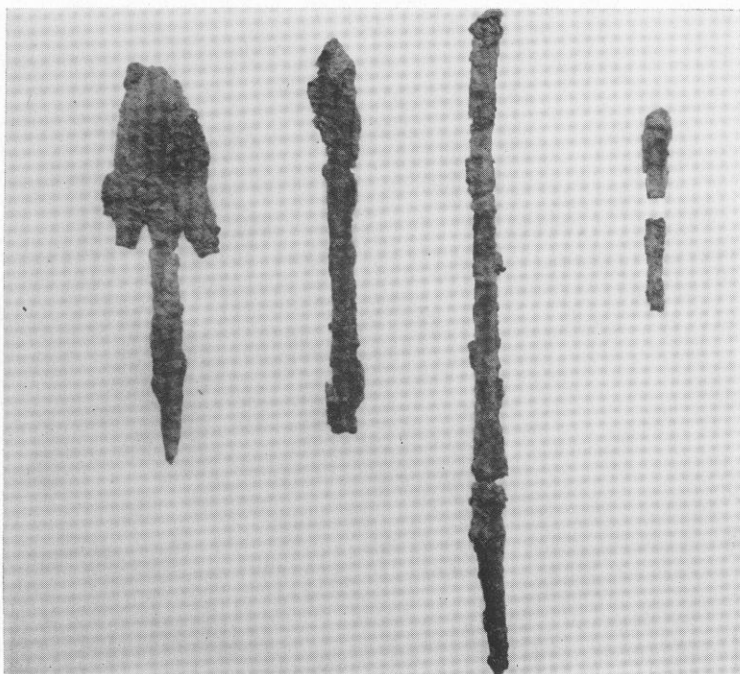


2. 破壊墳石材散布状態 (西より)

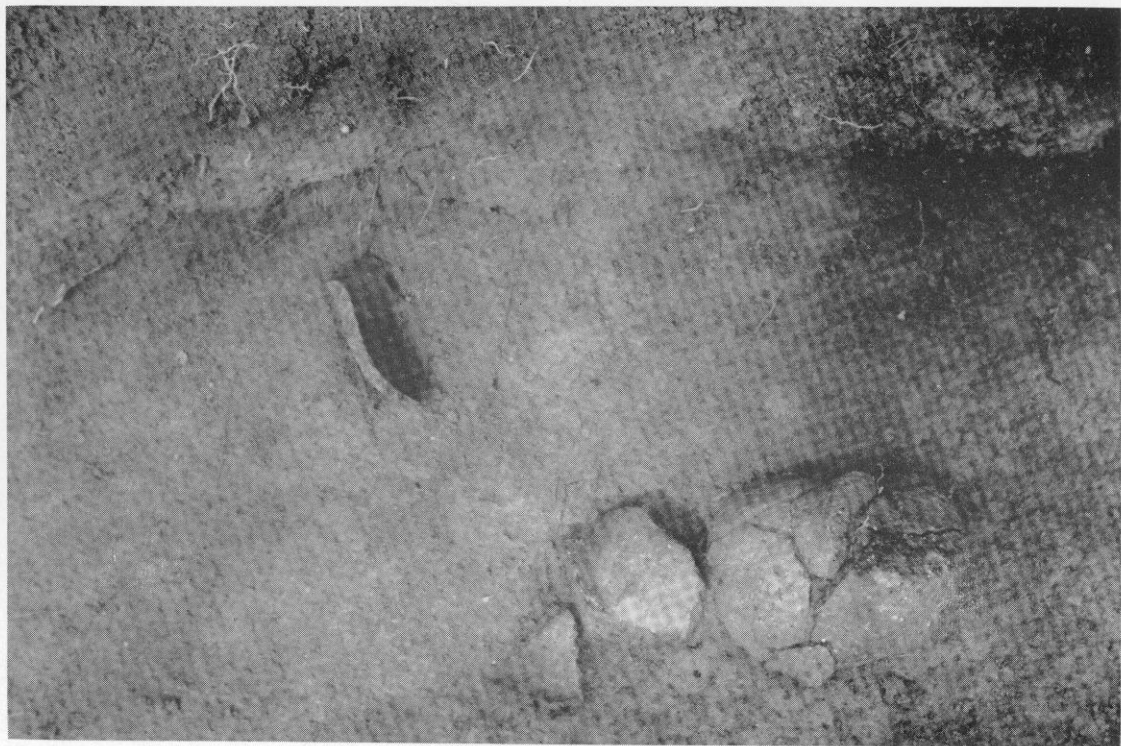
1、石室内出土ガラス小玉



2. 石室内出土鉄剣



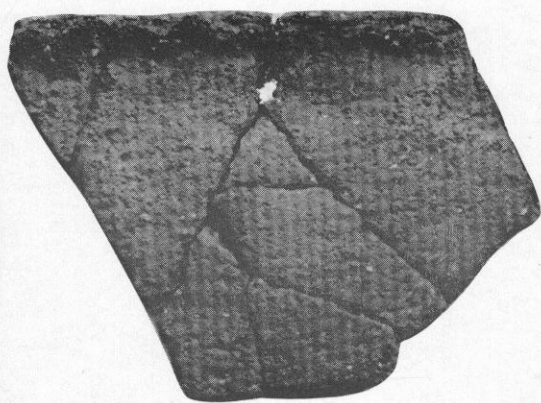
3. 石室内出土鉄鏃



1. 墳丘内遺物出土状態



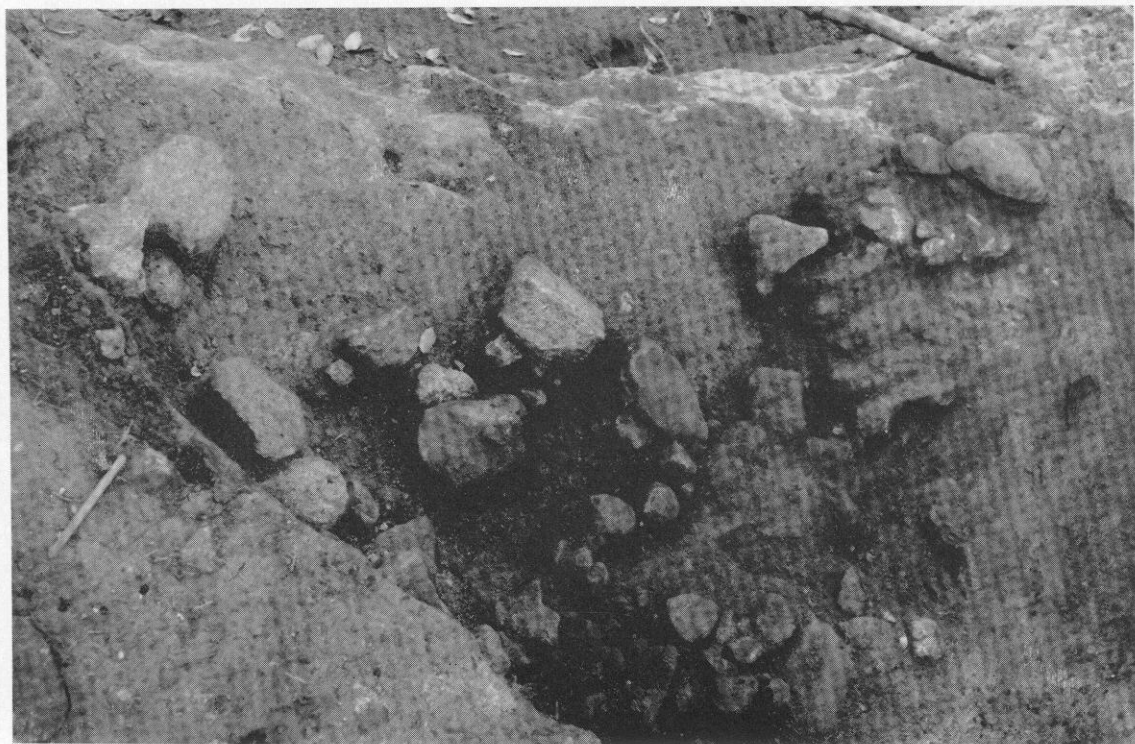
2. 墳丘出土土器



3. 墳丘出土土器



1. 住 居 地 (東より)



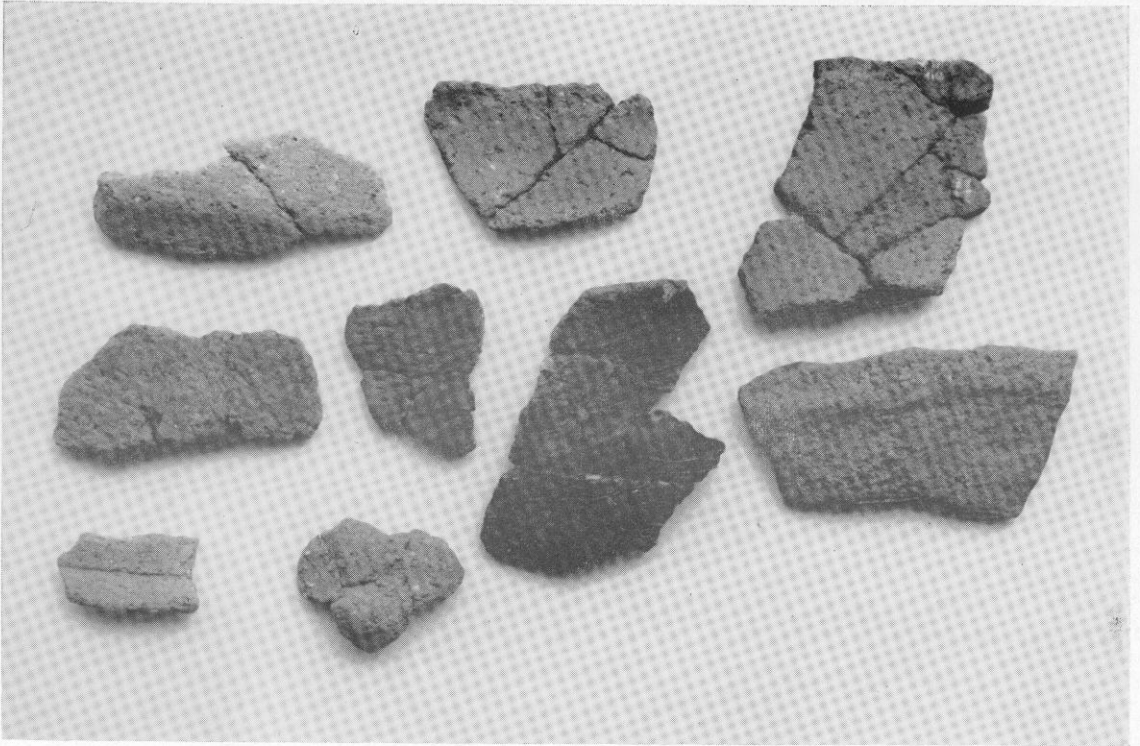
2. 住居地内の状態 (東より)



1. 住居地石材露出状態（北より）



2. 住居址内深鉢形土器出土状態



1. 住居址内出土遺物（粗製土器）



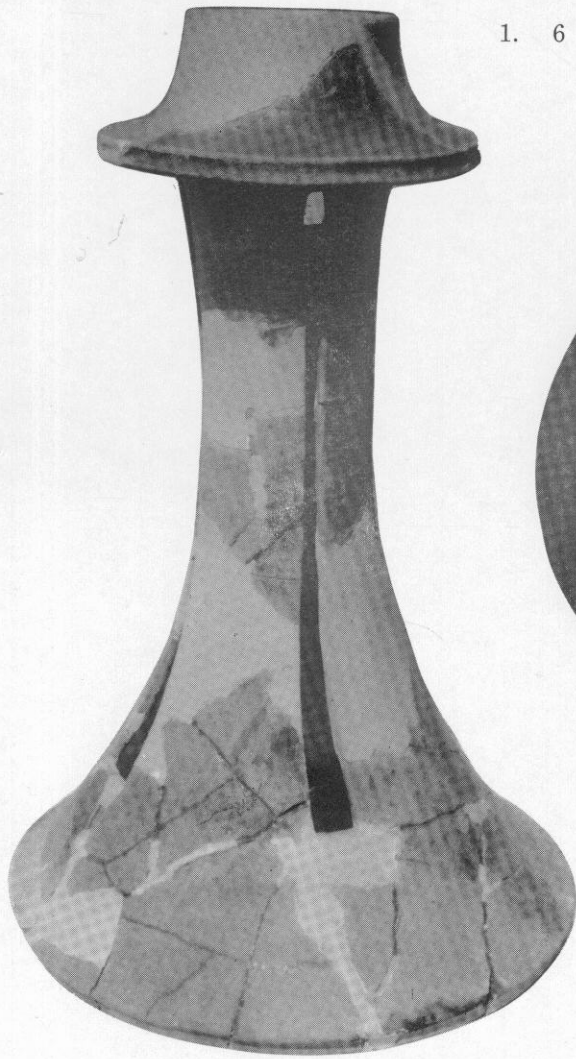
2. 住居址内出土遺物（精製磨研土器）

1、住居址内浅鉢形土器出土状態

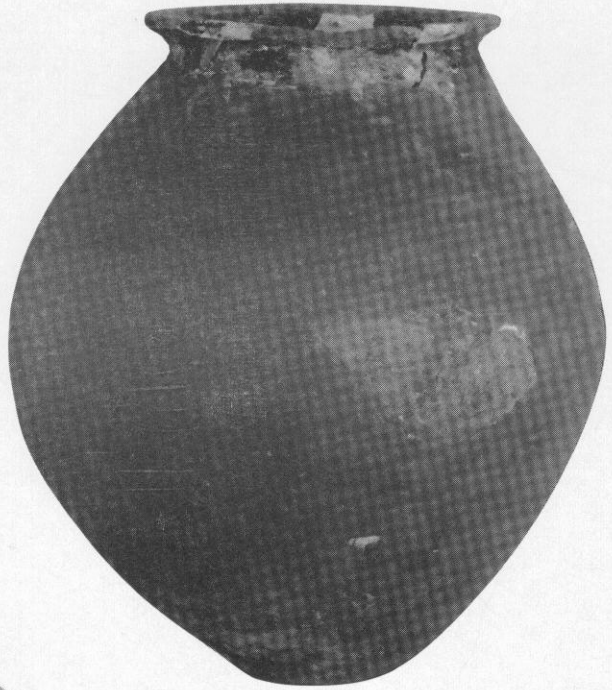


2. 6 トレンチ 遺跡 近影 (西より)

1. 6 トレンチ出土丹塗筒形土器



2. 6 トレンチ出土丹塗壺形土器



3. 6 トレンチ出土丹塗高杯



1. 6 トレンチ筒形器台，高坏出土状態



1. 6 トレンチ出土遺物

筑紫野市文化財調査報告書 第 1 集

昭和 47 年 3 月 31 日

発行 筑 紫 野 市 教 育 委 員 会
筑紫野市大字二日市753—1

印刷 栄 光 印 刷 株 式 会 社
福岡市清水1丁目16—1